
全書・第八巻・六節 “世界の全て”

ユラ=キロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全書・第八巻・六節 ”世界の全て”

【Nコード】

N1160E

【作者名】

ユラllキロ

【あらすじ】

「この世の秘密が全て分かりますよ？」脳に直接響く声に導かれ、疑問を思いながらも、探求心には勝てず、本を手にしてしまう少年の、数奇な運命への旅立ち……。 「こんなことになるなら……。 いっそ、世界なんてなくなれ！！！」

プロローグ

この世には、ありとあらゆるものが存在する。

色々なモノが、色々な形で、成長、発達を繰り返す。

その中でも、動物に分類される”人”は、特に目を引く発展をしてきた。

最初は、類人猿を言われ、猿と同様なもの。

原人など、少しずつ少しづつ、長い年月をかけて、成長してきた。そんな中、この世界の時代の元となる者が誕生する。

あなたのご存知の通り、「イエス・キリスト」だ。

私とて、そんな人間の歴史を長ったらしく話す気も毛頭ないし、あなたも嫌なはずだ。

話は最近のことになるが、今の地球上は大変ありえないことになっている。

環境破壊、地球温暖化、核兵器保有、等々、エトセトラ、e t c. もちろん、人は、これを『地球上のありえないこと』だと思う。

ま、これが当然って言えば、当然だ。

でも、これは「表」の問題でしかない。

私が言いたい、本当の『地球上のありえないこと』は「裏」の話だ。そのことを書かれた書物がここにある。

名を「世界の全て」……まあ、正式名称は『全書・第八巻・六節・”世界の全て”』だ。

この世の秘密が全て分かりますよ？
この書物を読めば、「表」の問題はともかく、「裏」の問題も何な
のか分かりますよ？？

どうですか、興味を注がれません？

あなたはこの事を知るべきだ、いや、知らなければなりません。
え、知るのが怖い？？

そんなこと言ったら、これから何も知ることができませんよ？
そう言われても決心が今ひとつ付かないって？　しょうがないなあ
……ん？

ちようどいい。　あなたが決心付かないのなら、先客を本の中へと
招待しましょう。

あなたは、「裏」の『地球上のありえないこと』を覗き見していれ
ばいいでしょう。

少なからず見えますよ……。

では、私は先客を招待してきましょう。

それではまた……ごきげんよう……。

ふふふふ……。

第1話：理不尽な世界

カッカッカッ：

掛けていた眼鏡が吹っ飛ぶ音が遠く聞こえる。

それと同時に意識がぶっ飛ぶような衝撃と頬の痛みが走る。

七月二十日、高校が夏休みにもうすぐ差し掛かる今日。

この世界の住人の一人、高校一年生の咲本さきもと 焰ほむらには災難な日となった。

眼鏡を掛け、知的を想像させるその容姿はどこかしら、他人と距離を作るイメージだ。

人間性、頭脳、外見、どれをとっても、不足は無いが、唯一、友達と呼べるものがない。

その、天才ともいえる頭を持つことで周りから遠ざかり、いつからか、彼は孤独となっていた。

元々、”聞かれなければ答えない”ような性格なので、周りは勝手な噂を立てる。

彼はそんなことはお構いなし。いつものように横で噂されようが関係ない。

今日は、先輩たちに意味も無く呼び出され、ランチ。

日常のストレスの発散が目的と思われるそれは、しばらくすれば終

わった。

「ちっ……。どうすっかな、この傷。母さんにどういう言い訳を用意するか……」

家に帰宅した時に母親にどう説明するか、呟きながら試行錯誤している……。

「あ！ 咲本くん？」

いきなり見覚えの無い同学園の制服を着た少女に話しかけられた。

「ん……。すまないが俺はお前と知り合いか？ だとしたら、俺との関係を教えてくれ」

「え、ひどい。忘れちゃったの？ クラスメイトの佐久間^{さくま}稔^みだよ。覚えてね！」

『ああそうか、すまない。極力覚える様に努力する』

俺は大通りで出会った、自称クラスメイトの女子”佐久間稔里”に、いい加減なことを言っていると……

「あ、稔里、ダメでしょ！ こんな奴と話したら、嫌われるよ」
いきなり俺と会話している佐久間に話しかけた知り合いらしき奴が入ってきた。

「え、なんで?？」

…当の佐久間事態は、気づいてないようだ。

「いいから、早くあっち行こ!!」

「え、……うん。じゃあ、また明日学校でね、咲本君」

「だから、あんな奴と……」

……世の中なんて、こんなものさ。

意味も無く、自分より劣っていると、他人に決め付け、蔑み、罵倒する。

そんなことしてないと、自分に自信がなくなるんだよ。

いつでも、あいつよりーが良かったから、少なくとも自分は他人より勝ってる……。

そう思い込んでるだけさ。 いや、俺は別に自信過剰でも自意識過剰でもないがな……。

いつも俺はこんな世界に嫌気が差す。

CO₂がどうのこうので、暑くなるとか、核がなんちゃらか……。

俺がいつも心の中で結局呟くこと……それは。

——くだらん。 いっそ世界が消えて無くなれば良い。

そうさ、そうなればさっきのような理不尽極まりない事も起こらないだろうよ……。

第2話：異変の報せ

あの後俺は帰宅、母さんにこっぴどく叱られ、…て、俺は何も悪くない。

今は俺の部屋、夕食までの間、ベットに寝転んでいる。

うとうとしかけていた時……

——この世界の秘密を知りたくは無いですか？

いきなり声が聞こえた。

寝そうになっていたから、俺ではない。 ……きっと多分。

「……誰だ？」

不意に俺は周りを見回した。

そこには変わらず、そのままの俺の部屋がある。

——そんなに驚かなくても……。

（いやいや、驚くだろう……）

——まあ、いいでしょう。それで、再度聞きますが、あなたは”世界の秘密”を知りたくは無いですか？？

「……いきなりなんだ、つかどういう意味だ」

——質問を質問で返さないでくださいよ。

「どっちにしろ俺には世界の秘密なんて関係ないさ。それに、知った所で何をしろってんだ」

——……貴方だけにしか出来ない事が、あるのですよ。

「……言っている意味が理解できないな」

——……埒が明きませんね。仕方ない、一つヒントを与えましょう。あなたは明日、学校の図書館で無性に気になった本を借りる。

「何言っている？ 借りる借りないは俺の自由だし、関係ないだろ」

——違います。これはもう決まったこと、”真実”であり”運命”であり”必然”なのです。これを変える事は出来ません。

「何言ってんだ、当事者の同意なしに勝手に決めんなよ」

——遅いのですよ、もう。私の声が聞こえてしまった時点で……。もし、もしも変える事が出来たなら、変えてあげてくださいね……。…。

「さっきから理解不能、というより会話になってないが、一応聞こう。何をだ……」

——神に……。いえ、”世界に愛されてしまった少女”を、救ってあげてくださいね。……………私はここまでです。ではまた、ごきげんよう。

……そう、謎の声が言うと、存在していた気配が徐々に頭の中から消え去った。

……何だっただよ、もう。
俺の頭はおかしくなったのか？

しばらくすると、夕食の知らせの母さんの声が聞こえた……。

第3話…突然の旅立ち

……次の日。

昨日の夜の声の事など、はっきりと頭から消え去り、忘れていた。いつもと同じように起き、同じように朝飯を食い、同じように登校。そして、同じようにクラスの奴らに何か言われ、同じように授業をこなす。

そんな、変わらない平和な世界で俺は満足していた。

そりゃ、時にはRPGのようなファンタジー的世界に行って魔王を殺つたり…え？

表現がリアル？　しょうがないだろ。　実際「〴〵を倒した！」なんて表記だが実際は殺したと同じだろう？

ザコ敵がいちいち怪物じゃなくて人間型だったら、勇者様一行なんて戦闘一回一回罪悪感に苛まれる^{さいな}だろ……。

……と、俺はこんな事を言いたかった訳ではない。

結局の所、そんなことは妄想の範囲内にして、現実を見ろって事だな。

とうにそんな誘惑範囲から抜け出した俺は、ただただ毎日を当たり前の形で過ごすだけ。

……………今日まではな。

一日の始め、朝のホームルームでの出欠確認、つまり点呼で、「佐久間稔里」が欠席していた。
なぜそんなことをほざくかと言うと、昨日のことで分かるだろう。
俺に普通に話しかけて来るのは、あいつ、ただ一人だけだったからな。

「なんで稔里ちゃん休みなんだろうね？」

「ホントホント、稔里が休んだトコ見たこと無いよ？」

「そういえば昨日その大通りで咲本と話してたっさ
…」

「まさかあいつが話してる間に、未知のウイルスを稔里ちゃんに…」

ククク……思わず、苦笑してしまう。 なんて頭の悪い会話だ、笑えてくる。

特別、今日は不快な視線が大幅に増えている。

昼休みに突入しても、嫌な視線は減ったりはしない。

俺は、命からがら逃げた、脱走兵の如き足取りで、避難場所、学校の”図書館”に行った。

もちろん昼飯は済ませている。 ……こらそこ、ちゃっかりとか言うなっ！！

最初に言ったとおり、俺の頭からは、昨日の晩飯前のあのよく分からない会話(?)の事が消え去っていた。

特段する事も無いが、何もしてないと見回り図書委員に追い出されるので、とりあえずブラブラした。

しかし、入るところを間違えた。

この列、棚は海外の書物の原本。

つまり、翻訳前の英語文の物。

別に読めない訳でもないが、和訳が面倒だ。

……と、一冊の本が、目に留まった。

その本には、洋物ばかりの棚の中、一冊だけ、日本語で、こう、書かれていた。

「全書・第八卷・六節」世界の全て」

この文字の羅列を読み取った瞬間、あの会話が鮮明に蘇る。

——世界の秘密を知りたくは：

——あなたは明日、図書館で本を：

——これは”真実”であり”運命”であり”必然”：

……これの事だったのか。

今現在、俺はこの本の中身が無性に気になっている。

だが、借りるのか？　これでは奴(?)の思う壺だ……。

頭を抱え、しゃがみこんで考えていると……

キーンコーンカーンコーン…

予鈴が鳴り始めた。

その時、俺は直感で、今逃せば二度と手に入らない……と不覚にも思ってしまった。

すぐさま、その本を棚から抜き取り、図書委員に突き出す。

「あれ？こんな本あったっけ…？」

図書貸し出しカードに本の題名を書いている時に聞こえた…。

——クスクス……これであなともこっちの仲間入りね…。

こんな言葉が聞こえた……気がした。

○○○

そして帰宅……

帰ってすぐさま自室にこもり、カバンから借りた本を出す。

ちゃんとする。

……「全書・第八卷・六節」世界の全て」と言う題名の本が。

俺はしばらく躊躇ちゅうちゅうした。

この本には何が書いてあるのか……。

最もらしい題名にしては、書いてる事が馬鹿みたいな事とかもあるかもしれない。

……そんな事も想像してみた。

しかし、今の俺には、そんな事で押し切り、この本を紐解く事など出来はしない。

自室にこもる事、約30分。

ようやく心が落ち着いた俺は、決心し、本を開ける事にした。

ガパッ！……

……何も書いてない。

ただ右下端に、「7月21日」と書いているだけ……。

ん、この日にち、今日だ……。

と、気づいた瞬間、目の前が揺らいた。
ぼやけて、まるで目に見える全てがドット絵のようだ。

しばらくして、俺は気を失った――。

○○○

んん…。

目が覚めた俺は、立ち上がり、辺りを見回した。

周りは地平線まで途切れる事の無い、草原。

その奥にぼんやりと、山らしきものが見える。

『どこなんだ、ここ?!』

俺は半狂乱^{はんきょうらん}で叫んでいた……。。

第4話：未知の世界

ホントに周り、ただただ草原……。足元から、数百キロまで、360。……草原。

空は澄み切った青、雲一つ無い。風はそよそよと心地よい……。これこそ快い晴れ、つまり快晴だ。

……状況は読み込めないが、何とか頭の中を整理し……。いや、出来ないが、とりあえず精神を落ち着かせた。

○○○

…ただ黙ってても、餓死する可能性が高いので、一応歩いてみた。

どんなに歩いたって草原…草原…草原……。なんか悲しくなって来たので、独り言を喋る事にする。

「この前のテスト何点だっけ？ ……て、俺100点しか取った事無いか……」

「そーいや佐久間大丈夫かな？」

結局休んだ原因は分からずじまいだったが、一応心配はしてみる。

「最終的に、ここ何処なん……」

グギャアアアアアアアアアアアア！

なんだ今の……気づいたら足元の周りに大きく影が出来てる。雲でも出てきたのか……？

俺の第6感が作用し、命の危機に立たされてそんな気がしてならず、俺は轟音の発信源だと思われる後ろに振り返った。

「なんだあれ……？！……！」

そこには、いつもと同じようなクラスメイトや、笑顔の佐久間稔里でも無く……

RPGのに出てきそうな……”翼を持つドラゴン”だった。やっぱりこんな感じの生物なんだ、ドラゴンで。

今にも炎を口から吐きそうな勢いの形相だ。けい……失礼、あれは元からか

……ところがどっこいコイツは炎ではなく氷を吐くのか、口から冷気のような白い煙(?)を漏れている。

グギャアアアアアアアアアア！……！

……キュウウウウウウ！！

……ナンカ、口の周りに溜まってますけど……あれが俗に言う「タメ技」みたいなものだよね？

「ハメ技」じゃないぞ。 あんなん喰らったら、ハメられる前に一撃死だよ。

解答者が誰も居ない俺の疑問はあっさり轟音に掻き消された。

……と、さっきから落ち着いて解説しているヒマは、実は無い。

あのドラゴンの口はこっちを向いている。

……多分、あれは俺狙ってんだな、あははのは……

グギャアアアアアア？？！！！！

今度はなんだ？ なんか細長い物……矢（？）が刺さってドラゴンが苦しみ、空から地に舞い降りた……つか、落ちた？ つか、絶命？

「やったか？！」

ドラゴンの向こう側から、軽鎧けいがいマントを着て、剣を持った青年と、肩鎧けんがいを着て、弓を持つ少女がやってきた。

ドラゴンに刺さったのは、やはり矢だったのか……と納得している余裕は無い。

……すみません……どなたさま？

グルルウウ……

さっきまで血気盛んに俺を狙っていたドラゴンは矢一発でもう虫の息だった。

「にしても、なんでこんな何も無い所に大型飛竜が出たんだろ？」

「知らないよ。でも一発だったし楽勝だったからいいじゃん♪ さっさと戻ろ」

青年と少女とは言ったが、実際、二人とも俺と同じくらいのようにだった。

……ここは進み出るべきか、否か。……答えは決まっている。

「す、すみませ〜ん」

「うわっ!!」

「きゃあ!!」

はい、綺麗な悲鳴の二重奏が聞こえました。

「なんだ、人か。びっくりしたあ…」

「ホントホント、いきなり出てこないでよ!!」

「あのゝすみません。ちょっと道に迷ったんですけど、ここ何処ですか?」

「ん、迷った?　ここは”シンセプト”の西端の町『チェンク』の郊外の草原だよ」

「…シンセプト?　…チェンク??　どれも聞きなれない名前だ。」

「え、と…、ここはどこの国ですか?」

「あんた何言ってるの?　”シンセプト”って言ったじゃない。…て言うか、あんたはどっから来たのよ」

「ええと…”来た”と言うより”来てた”て感じですね。いつの間にかここらで倒れてたんです」

「えっ…あんたがまさかさっきのりゅうせ…フガッ!!」

少女が喋ってる途中で青年が腕で口を押さえた。

「ま、まあなんだ。　ここで立ち話もなんだから町まで行こうぜ」

「あ、はい。　て言うかなんで口押さえてるんですか？」

「そ……そこら辺はツッコむべき所ではないぞ？」

「そういうもんですか？」

「フガフガ？」

少女は口を押さえられた状態で頷いた。

「じゃあ行こうぜ。チェンクはこっちだ」

青年が指を指した方向に小さく町が見えた。

……て事で俺は希望の星とも言えるその町に向け、歩き出した。

……その歩みが、未来にどれほど影響を起こすのか知らずに……。

（ね、ねえ、なんでさっき抑えたの？）

（あいつには自覚が無かった。無理に言っても無駄だし、逆に傷つけるかもしれないだろ？）

(なるほど!!)

俺が知らない所で、こんなコソコソ話があったことなど、もちろん俺は知らない。

第5話：騎士たちとの出会い

青年達に連れてかれた場所は、シンセプト西端の町、チェンクの酒場だった。

酒場というからには、うるさく、店中に酒臭がこもっていた。

「さてと、ここでゆっくり話ができるな……と思ったけど、まだ自己紹介もしてなかったな」

「あ、俺は咲本焰って言います」

「サキモトホムラ？ ……何処で区切んの？」

「サキモト〓ホムラ。ホムラって呼んでください」

「おう、わかった。俺はシンセプト騎士団聖騎士隊、『プライン〓コルトス』ってんだ。よろしくな、ホムラ」

「私はシンセプト弓術団、魔道弓隊『ルネ〓シャイン』よ。二名ふたつなは”ドラゴンスナイパー”だから、『ルネ』って呼んでね」

二名……つまりは称号みたいなものか、と勝手に納得。

「……なんでお前だけで別名言うんだよ、俺にだって、”聖なる神の護り手”て二名あるからな！」

「だってその二名って、騎士団のナイトって感じの二名じゃないじゃん！」

「もしかして、二人とも強かったり……?」

「具体的に強いとか弱いとか分かんないけど、私は弓術団の副団長だし、プラインも騎士団の部隊長を任されてるよ」

「まあ、強くなって有名になったっからって、いい事ばかりということはないさ。……今のようにな」

ふと周りを見ると、さっきまで飲み食い騒いでた酒場の客たちが、俺たちのテーブルを囲んでいた。

「な、なあ、あんたら、さっきの話聞いちゃったが…あんたら騎士団の人なのかい?」

「ああ、そうだが…」

少々戸惑いが混ざる言い方をする町人と、答えるプライン。

「そ、それで隊長級の有名人なのか?」

「まあ、…そうよ、だから?」

「じゃ、じゃあ、一つ頼みがあるんだが」

「……言ってみろ」

「……………その首、ちょっと頂けませんかねえ?」

その言葉を聞いた途端、背筋に寒気が通った。

そして気づいた。……何にって？

……俺たちを囲んでた町民全員が、ビール瓶やら何やらを手に、にじ滲みよって来る事に。

すると、プラインが、

「ホムラ、ちいとばかり頭抑えてろ」

言うが早いか、するが早いか……
言った瞬間、テーブルの上に乗り、剣を抜刀させて一回転の横薙ぎをしていた。

町民たちに届くはずが無く、触れさえもしなかったその横薙ぎは、
何故か全方向の町民にヒット。
俺たちのテーブルを中心にドミノ倒しになった。

「俺たちがこの町に来た理由は最近ここの治安が悪くなっていると
言う情報が届いたからなんだ」

「そうなんですか…」

「ま、もう一個あるんだけどね、極秘だから秘密☆」

ルネがいたずらっぽく笑ってみせた。

「ま、どっちでもいいんだがな。それより……おい、てめえら！

殺されるか捕まりたくなかったらさっさと散れ!!」

見るも無残に、へっぴり腰になりながら、町人はワラワラと酒場から消えていった……。

「馬鹿よねえ。敵わないって分かっているのにかかって来るなんて……」

「でも、なんで有名だからって今みたいに命を狙われるんですか？」

「シンセプトに反抗しているレジスタンスから、賞金首みたいに賞金かけられてんのさ」

苦笑のため息交じりに、プラインが言っていた。

俺はその時、こんなわけの分からん世界にいることを忘れ、ただただ”この世界の現実”を見せられた気でいた。

こんなもの、あとから分かることに比べれば、どうでも良いような事とは知らずに……。

第6話：予言の星少年

「さーて、こんなこと聞くのもアレだが……」

プラインが話を切り出した。

「お前はホントにこの世界のことを知らないんだな？」

「ああ。俺はこことはまた別の世界にいた」

「なんてトコ？」

「地球って所です。別の呼び方だとアースとかガイアとか言いますね」

「この世界は”テラ”って言うんだ」

俺の考えでは

「あ、あのね、ここ、シンセプトのお城に”神官”って役職の人たちが居るんだけど」

「ああ、それが？」

「その神官は予言が出来るんだが……この前、久々に予言したと思ったら、こんなことをほざきやがったんだ」

それまで喋っていたのがルネだったのに、いきなりプラインに変わったことに特に気にせず、聞き返す。

「なんて？」

「異なる世界から、猛^{たけ}りの炎が星となりて天空の彼方からやって来る……ってな」

「……そのことを何で俺に？？」

「気付かないか？ これは俺の推測だが……この予言、お前の事を指してんじゃないか？」

「……今…なんて？？」

「だ、か、ら！ 今の予言の言葉の中の”猛りの炎”って、ホムラなんじゃないの？！」

「い、いきなり言われても、一応俺の名前はホムラって火に関するものだけど……俺、別に猛ってないし、星でもないし…」

「ああ、猛りの部分はよくわからねえが、星だったら問題ない」

「な、何故？」

「さっきさあ、私がなんか言おうとしたけど、プラインに止められたでしょ？」

「ああ、そういえば……」

「あれね、ホムラが流星になって、落ちて来たことを言おうとしたんだよ♪」

「えっ?! 何だって??」

「説明すんのがめんどくなくて来ただろ……あのな、まずお前はさつき”竜”に襲われてたろ?」

「あのさ、まず、なんで人間以外の……その”竜”とか存在するの?」

「まさか……いや、まさかだとは思うがなホムラ、お前の世界って人間しか居ないのか?」

「いや、”獣”って言えば”獣”って言えるのも居るよ? ま、動物って呼んでるけど……比較のおとなしいし、懐かせて愛玩用に飼ったりとか……」

「いいなあ。一度ホムラの世界に行って見たいよ……」

「あ、あのよお、ホムラ。お前の、その地球には”魔獣”とか”竜”っていないのか?」

「イメージは湧くけど、いないな」

「しかたねえな。教えるしかないらしい」

「しょうがないでしょ、プライン。ホムラはこの世界の人間じゃないんだから」

「ま、それもそうなんだけどな……」

今、この二人に借りを返すと言うことは到底できないと悟った俺は、
今のトコとことん世話になるしかなかった…。

第7話：種族制度

「まず、最初に聞いとくが、お前の世界には活動生物は何種類部族がある？」

「部族なんてそんな……分けるなら動物と植物と虫……って言うか分けないし」

「ええ、分けないの?!」

「まあ、分けるほどいないしな……」

「マジかよ……。こっちは10種だぜ？」

「そんなに居るのか？」

「うん。ヒューマン人間族、ビースト獣族、デーモン悪魔族、エンジェル天使族、ゴッド神族、フェアリー妖精族、エルフエルフ族、ドラゴン竜族、グリーン植物族、アクア水棲族の10種だよ」

「ちなみに、俺は人間族でルネは天使族だぞ」

「えっ、ルネって人間じゃなかったのか？」

「あのなあホムラ、今説明したばっかだけど、人間じゃなくて人間族^{マシ}!!! ちなみに、読みはフリガナで頼む」

「ああ、いや、わかったが、種族ごとに外見とかで判断できないのか? なんか分けることが無かった俺から見れば大変で……」

「んー……まあ、ぱつと見、外見では人間族は俺みたいな奴で、獣族は獣耳がある…」

「で、私たち天使族は、背中に白い翼があつて、神族はあんまわかんない、口調かな？」

「妖精族は虫みたいな羽根があつてな、エルフ族は耳が長くて尖がつてるな、竜族はさっきのお前を襲ってた奴」

「植物族は、ほぼ皮膚の色が緑色で、水棲族は魚介類みたいな見た目だよ♪」

「プラインとルネが順々に説明してくれたおかげで、全体の3割ほどまでわかった……気がする。」

「……それで結局、何の話してたんだっけ？」

「そうそう、忘れるところだったな」

「なんでホムラが竜に襲われてたか、だよね」

「そう、この”竜に襲われた”て言うのがポイントなんだよ」

「へ、なんで？」

「あああああああああ！……そうかあ、だよなあ、やっぱ……」

いきなりプラインが発狂（絶叫）しだした。
正直、こういうのはやめてほしい、マジでビビッて心臓が破裂するから……。

「どうしたの、プライン？」

「もう説明すんのめんどいし。俺、説明苦手だし…ルネ、バトンタッチだ」

「なんで、もう説明は……」

「んあ、頼む、終わるまで寝てっからあ」

そういうと、プラインはテーブルに突っ伏し、しばらくするとすぐ寝息を立て始めた。

「……んじゃあ！ ここから、このルネ大先生が、ホムラのために、特別講習を、始めま……いたっ！！」

「うるさいわ、阿呆が」

大声を張り上げたルネに対し、プラインが石粒かなんかを飛ばし、ルネの後頭部に当てた。

「教えてやるんだったらな、もうちょっと声の音量を小さくしろよ」

「なによ、頼んだのそっちでしょ！！」

ルネは口を尖らしてる……面白いほどに。

「あのな、説明は頼んだが、近所迷惑は頼んでねえぞ？」

「うっ……ね、ねえホムラ、私そんな大きい声出してないよねえ？
ねえ?!」

ルネが今にも泣きそうな顔を近づけてくる……そんな言われても困るぞ。

「えっ……そこまで大きいとは思わなかったけど、隣で寝てたプラインを起こすには充分だったとは……思う」

プラインが「それ見ろ」と言わんばかりにへらへら笑っている。

対するルネは、「そんなこと無いもん」と主張するように、プラインのことをポカポカ叩いてる。

俺はと言うと、二人を止めようか、そのままにするか、迷っていた。にしてもこの二人を見ていると、なんだか俺より幼い感じがしてくるのだが……。

「はははっ……と、おふぎはこの位にして、俺は出かけるからな。
ルネ、ちゃんとした音量でホムラに教えてやれよ」

「わかってるわよっ!!」

おちよくるプラインに対してルネは、
噛み付くように言い放ち酒場
から追い出す勢いだった。

第8話：特徴、何処へ??

あれからルネはイジケテ説明してくれない。

仕方なしに俺が話をふった。

「そ、それでさあ、あの…他の事、教えてくれないかな?」

「ああ、ごめん!! わたしったら…なによあんなの、言わせておけばいいのよ、うん!!」

いきなり、ホントにいきなりガバツと立ち上がり、確認するように言った。

「あ、ごめん。説明だったね、あらかた種族の事は分かったと思うから、特徴を教えるね」

「ああ、うん……」

「まず、私のような天使族は翼を使って空を飛べるよ。今は隠してるけどね」

「翼って隠せるものなのか?」

「うん、なんなら見せてあげようか?」

「いや、いいよ。続けて」

「次に人間族は、特に無いんだよね…特徴が無いのが特徴かな？」

「なるほど……」

一応この世界でも人間が基準ということか…

「ああ……一個一個説明するなんて、私もめんどいよぉ……」

「んじゃ、無理に全部教えてくれなくてもいいよ。必要最低限のことを教えてくれよ」

「そう…じゃ最後に龍族ね」

「そうそう…なんで俺は龍族に襲われてたんだ？　なんかワケありっぽかったけど……」

「竜族は…強い力に惹かれるというか、感知するのよ。だからホムラは強い力の持ち主なんじゃない？」

「そうなのか？　……まあ、とりあえず、教えてくれてありがとう
な、ルネ」

そう言って久々の、本当に久々の感謝の言葉が出た。

正直、最後に言った竜族の感知能力について、疑問に思いつつも、迷っていた話を切り出す。

「で、正直一番聞きたいことがあるんだけど……」

「何？」

「俺って、これから何をすればいいの？」

正直、最初からこれを聞きたかった。

しかし、どのような答えが返ってくるのか怖くて、言えずにいた。

「んと、私とプラインを護衛に、首都『シンセプト』に来てもらうわ」

「何で俺なんかが？ ……あ、そうか、予言が何たらって言う……」

先に言われた事だが、どうも脳が情報の整理に追いつかず、右から左へ受け流していたらしい。

「うん、けどチェンクはシンセプトの一番端っこだからね。馬をとばして1週間、飛竜でも…3日はかかるからなあ。あ、ちなみにのらりくらり歩いたら確実に3週間は、かかるから」

……はと来ましたか

結局そんなのはプラインとルネのペースであって、足手まとい上等の俺がいたらもっとかかるだろう。

途方も無く情けない自分に少し殺意が芽生えた頃だった。

「おうホムラ、ちゃんと分かりにくい説明で理解できたか？」

プラインが帰ってきた。

それにしても何処に行っていたのか、肩には大きな布袋が……。

「分かりにくい説明ってなによ、あんたよりは分かりやすいわよ！」

「はは、一々んな事^{いちごち}で腹立てんな、それだからお前はガキって言われんだよ」

「ううう〜」

自分が幼そうだという事にコンプレックスを抱いているのか、弱点とも言えるそこを突かれたルネは暫く^{しばらく}口を開かなかった。

「ところでホムラ、お前何か使える得物^{えもの}ってあるか？」

「え、何をいきなり……」

ふと、昔の、幼かった自分の姿が脳裏に映る。

今はもう海外に赴任している親父と、あの頃は良くチャンバラをしていた。

チャンバラといっても中々、中身重視で、木刀の柄頭に分銅を付けて、本物さながらの重さの木刀を普通に振っていた。

あれは確か…5歳の時だったか？

「……まあ、お遊び程度だけど剣は振れる程度に扱えると…思う。

まあモノによると思うけどね」

「正直安心したぜ、実はあてがないまままで買ったからさ……。で、その買い物がこれだ」

プラインは肩の布袋の口を止めてる紐を解き、その中身を机に並べた。

……それは、よく空想RPGに出てくるような、男ならば一度は誰でも所持してみたいと思うもの。

つまり、「剣」そのものがそこにあった。

洗練された銀の光沢を持ち、その輝いた刀身は鋭く獲物に喰いつく刃。

「よっし、ルネはほっというて……ホムラ、行くぞ！」

ひとつ言いたい、……何処に????

第9話：特訓、追風陣

プラインに連れられて辿り着いたのは、町から少し離れた丘だった。そこに着くまで少なからず地球では剣など一般的に馴染みの無い物という事だけは伝えた。

……まさか、いきなり本組手なんて無いよな？

丘に着くなり、プラインは自らの鎧などを脱いでいき、それを終えると片手に小振りな剣を持ち、俺と対峙した。

「さてホムラ、さっきお前は振れる程度とは言ったけど、剣の経験は？」

「ほとんど……皆無だよ」

「そうか、まあその大きさの剣を片手でひよいひよい持てるだけかなり教えるほうも楽なんだよな」

そう言われて思わず手に持っている剣を見つめ、目の前に掲げ、観察した。

全体が何かの金属で作られ、柄はひんやりしていて……絶対後で手が臭くなるな……

刀身は見た感じ……80〜90センチのところか？ 薄く、刃は当然鋭い。刃幅は15くらい？ 若干安心できる。

だが、それほど重いと思うほどの重量感ではない。

……持ちやすいという事もあると思うが。

「剣に馴染みの無いお前がまず覚えるべきことは”防御”だ。 剣

で相手の攻撃を防いだときの衝撃に慣れる事が剣を振るう者の絶対条件の一つだ」

「具体的に…やっぱりプラインの攻撃を受ける事？」

「ああ、何回もホムラに打ち込んで、重心やら構えやらを訓えるかな。まず剣を横に構えてくれ。一応両手で支えてな」

無言で頷き、刀身で右から左に両手で構えた。…次の瞬間。

キィィィィィンン！！！！

耳を劈くような金属音が聞こえた。……と思うと、次に来るのは剣を手から零れ落としそうになる腕に来るビリビリと痺れを伴う衝撃。

「うっ！」

思わず衝撃に負け、後ろのめりになり……ドスン！
衝撃を受け止められずにそのまま尻餅をついてしまった。

「おっと、すまん。大丈夫か？」

自分の不甲斐なさに落ち込みはしないが情けないと思いつつ、プラインの手を借り立ち上がる。

「はぁ~~~~~」

複雑な俺の胸中を察してくれたのか、プラインは、

「おいおい、そんなくよくよすんなよ。ていうか、今の真面目に受け止められても俺の威厳が無いんですけど、一応俺隊長よ?」

「ああ、そういえば」

すごく失礼だが、すっかり忘れていた。

「そんな今知ったみたいな反応するなよな、まあ結構お遊びみたいにやったのは事実だけどさ……」

その何気ないプラインの発言に、俺は愕然とした。

「お遊び」……その言葉はつまり本気でもなく、恐らく力の半分も出してはいないのだろう。

その悔しい感情とは別に、俺は昔のことを思い出していた。

父さんとやっていたチャンバラ……。

父さんは大人気なく、俺にむちゃくちゃな強さでかかって来ていた。
おとなげ

よく言っていた言葉を、思い出していた。

「守りなんてするもんじゃない、守る事でそれしか出来ないからな」

「じゃあ、何をすればいいの?」

まだ幼い俺は意味が分からなかった。

「守らないで、受け流せ。受け流せば、自ずと相手の隙も見えてくる。反撃が出来る」

「……じゃあ、どうすればいいの?」

「それを今からその特訓だ!!」

○○○

「おい、そんなに立ち直れないのか?」

プラインの声で我に返った。

大分昔のことを思い出していた気がする。

「それじゃ、もうちょいやろうぜ。さっきのフォームは良かったけどな、もうちょっと重心を下げて……ドッシリ構えるように前傾姿勢を取ってみな」

指摘通りに構えてみる。

「んじゃあ……行くぜ!」

先ほどと変わらず物凄い衝撃が腕に走る。

だが今度はその衝撃を肩、腰、足、全身で受け止める事ができ、前傾姿勢を取った事もあり、後ろのめりになる事もなかった。

「うおっ、ととと……ふう……」

しかし強い事には変わらない、早くも身体が音を上げかけている。

「良くなつたろ？ ホムラは呑み込みが早くて良いな」

「けど、正直辛いな。このまま防御の訓練を続ければ、明日は多分筋肉痛で動けないと思う……」

「……意外と貧弱なのな、パツと見結構いい筋肉の付き方してると思うんだけど……」

「嬉しいけど、生憎向こうではこんなに鍛える必要性がないからな。それにこんな事に慣れてないし。まあ慣れてても嫌だけど……」

「そうか、じゃあ、実戦向けに戦闘の時の行動とか、そうだな……単刀直入に”攻撃”の仕方でもやるか？」

身体の調子を考えてもあまり気乗りはしないが、防御よりは一方的じゃないから、まだ良いと思った。

……小さい時だって防御なんてやらずに、「受け流しつつ迎撃」しかやってなかったからな……。

「……わかったよ。で、どうすればいいんだ？」

「とりあえず、俺に一撃入れろ。話はそれからだ」

プラインが俺に向かって木刀を投げて寄越した。

意味が分からない……

「……どうしろって？」

「だ。か、ら、俺に一撃入れろ、その剣で。俺は防御しかない

から、ホムラの太刀筋とか見ててやる。 10分して一本も入んなかったら強制的にやめるからな」

「……わかった」

渋々？俺は投げられた木刀を拾い、構える。

「さあ、どこからでも来い！」

とりあえず突っ込みつつも、昔の記憶を頼りに袈裟斬りけさざりしてみる。

キイイイイイイン……。

…しかし、呆気なく弾かれる。

一度距離を置き、もう一度。

今度はあのバカ親父を何度も騙したフェイントを混ぜた一撃。 …

だが、

ガキイイイイイイン……

プラインには効かず、また弾かれる。

「太刀筋は悪くない……というより、それ我流か？ なんか型に嵌はまってないか？」

「はあはあはあ……わからん、昔テキトーにやってたのを思い出しつつ振ってるから」

たった二撃しかしてないのに、結構疲れる。 早くも息があがって

る始末……。

「へえ……相当実戦向きな事やってたんだな」

プラインの言葉を他所に、俺はあの頃の記憶に役に立つ事はないかと考えてた。

何かないか……あるようでないものだと少し愕然^{がくぜん}。

……ふと、ある事を思い出した。

懐かしい、今でも時折不思議に思い、理屈を考えてしまう親父がやっていた事。

本人は”魔法”と豪語していたホントに魔法だと思ってしまう超常現象。

それを使うのに呟いていた言葉の羅列を無意識に思い出す。

「おーい、あと1分くらいだぞ」

またもや物思いにふけてしまった。……つかどんだけ時間を消費した？

まあいいやと思いつつ、傍から見れば馬鹿馬鹿しい賭けを何故かしていた……。

『風よ吹け…我が立つこの地へ…流麗^{りゅうれい}の…旋風^{せんぷう}瞬^{またた}き……我は跳ぶ…
……追風陣^{ついふうじん}ツ!!』

……途端、突風が追い風としてプラインに襲い掛かる。

その風に追いやられ、プラインの構えが疎かになった瞬間……。

自分でも何が起こったか、よくわからなかった。

普通に突撃したはずだったのに、飛び出した一歩めでプラインの懐^{ふとこ}へ瞬間移動していた。

とりあえず、理由もわからずだったが、プラインの腹目掛けて軽く一撃入れて、その日の訓練は終わりを告げてしまった。

プラインは目を丸くしつつも、何かに納得した態度で、町に戻る途中、戻った後でも一言も言葉を発さなかった。

……………あれ？

さっきの、何で誰もツツコまないの??!

第9話：特訓、追風陣（後書き）

大変長らく前の話と間を空けてしまい、申し訳御座いませんでした。しかしこの期間、大体考えていた案を急激に変更等をしていて、さらに面白く、深い作品への構成を練っておりましたので、決してムダではないと考えてください。

次からはこのような事をしないと誓いつつ、厚かましいですが、これから「全書・第八巻・六節」世界の全て」を宜しく願います。

第10話：穏やかなハプニング

町に戻ると、ルネが門の所で待っていて、そのまま宿に案内してくれた。

「一応3人で1部屋だから。軍資金は渡されてるけど、節約には越した事ないからね」

と言うルネの言葉通り15畳ほどの空間にベッドとイス3つ、大きい丸テーブル1つある部屋に案内された。

既に2つのベッドにはプラインとルネの私物が置かれていて、必然的に正面奥の窓際のベッドを選ばざるおえなかった。

とりあえず試しにベッドにそのまま倒れこむと、スプリングが内蔵されてないベッドは、そのままスウ……とベッドに沈んだ。

寝心地はそこまで悪くはないようだ。

不意にコンコンと部屋のドアを叩く音が聞こえた。続いて「ホームラ、居る？」と言う少女の声。

「なんだルネか、どしたの、入れば？」

ガチャ…と控えめに開けられたドアの向こうから、鎧を脱いでラフな服装のルネがいた。

しかし、中には入って来ないで俺に向かって一言。

「その……寝るのに着替えないの？」と、問われてしまった。

そして、今気付いてしまった。

今着ている服が、俺が通う”蒼星学園”そうせいがくえんの制服であることに……。

ポリエステル100%の白いブレザーに、ポリ50%＋ウール50%の若干ストレッチする灰色スラックス……。

そういえば学校から帰って来て、そのまま”あの本”開いたから……着替えてねえや。

気付かなかった自分に強くショック……。

「まさか、それで寝ないよね……？」

「いやあ、俺も今気付いたけどな……どうしよ、変えの服ないや」
ショックしつつも少々慌てる。

まあ、このままじゃ制服着て寝るんだからな……。

「やっぱり、そうだと思ってたからさ、さっきホムラ達待ってた時
についてにホムラの服買って置いたんだよね♪」

なんともまあ、良く出来た娘さんだこと……と近所のオバちゃんみ
たいな感想を口の中で漏らしつつ……

『うああ、すまん、つかありがとう。助かったよ……！』

「よかったあ。でもね、私が勝手に見繕ったから、その…ホムラ
には不満に思われるかもしれないんだけど……」

語尾のトーンがどんどん小さくなっていき、それと同様に顔も俯い
ていった。

「いや、そんなの気にしないよ。ルネ、ホントにありがとうな」

彼女を悲しませない(?)様に、満面の笑顔でルネに感謝。

「……あ、それで、コレがその服ね」

大きい間を置きつつ、服が入っているであろう手提げ袋を持って、俺に近づいて来る。

…少々頬に朱が差しているのは気のせいかな？
スタスタと順調だった足取りが突如急転。

「きゃあっ！」

「うわあっ！」

何が起こったか？

ルネのつま先が床の微かな凹凸に躓き、バランスを崩して前方にダイブ。

当然、ルネが服を手渡ししてくれるであろうと油断していた俺に突撃。

……結果、ベッドの上で俺はルネに馬乗りされてしまったというワケさ……鳩尾への激痛付でな。

それだけではまだ良かったさ……。

「おいホムラ……て、うおっ!？」

ルネの身体が影になってるせいで顔が見えないが、多分プラインが今の状況を目の当たりにしたのだろう。

「えっ、ライ?!?!」

「ああ、俺…邪魔者だなw」

「ちょっと、勘違いよ、何言ってるのよライ!!」

「……ホムラ、一言言っておく。なるべく優しくしてやれよ? w…
…じゃな、30分くらい待てば良いか? 俺は下に居るからな」

「ん……了解、なるべく早く行くから」

理解に苦しむ状況の中で何故か頭が冴えていた俺は、少々茶目っ気を出して答えていた。

けど正直、まだ小さいからと言って侮るべからず。^{あなど}未成熟のルネの身体はまだ幼女のそれに近いかもしれないが、人によっては満足しない人もいるだろうが、触れていて嫌悪する、というのはまさかないだろう。

ん? なんで俺がルネの身体に触れた時の感触を語ってるかって?
……そりゃあ、まあ、実際ほぼ隙間なく密着してるからな。ワハハ……

「ちよ、ホムラもなに答えてるのよ……て、まさか本気なの?!」

「んな慌てなくてもいいだろ、1時間くらい待っててやるから。
んじゃあ、ごゆっくりい〜」

ケタケタ笑いつつ鼻歌交じりにプラインが去っていくのを感じる。
…地味に器用だな。

プラインが去ってから静寂が部屋を支配していたが、ルネの一言でそれは途絶えた。

「……ホムラ………さっきの本気?」

『……開口一番がそれか……』

「だって、一応自分の貞操の危機かもしれないから……」

「危機って……まあ、大丈夫か？ 足痛めたとか、立てるか？」

苦笑しつつもルネの安否^{あんび}を確認する。

「え？ ええ…そんなことより……」

「ふふふ…冗談だって分からなかったか？ …ごめんな」

「ふえ?! そうだったの???」

凄く慌てたルネの態度を見て、爆笑の一步手前で踏み留まり、

「いくら俺でも会ってから一日も経ってない人にそんな事しないし、相手の同意なんて関係ないという悪漢には成れないよ。そして、そんな奴は男としてどうかと……」

「そ、そうだよね!! いくらホームラでも私は無いよね…アハハハハ……」

「いくらって…俺のなにを知っているんだ？」

「そーゆー意味じゃなくて……」

「ま、どっちにしろ、わからんぞ？ 充分ルネは魅力的だとは思いますが……そろそろ離れような？」

「うわぁ！ ごめんごめん……！！」

「いや、ともかく服ありがとうな」

「あ、うん。 その…ホムラほどの顔があればその服もそつなく着れると思うから、じゃあまたあとでね！」

ほとんどダッシュに近い速度で部屋をあとにしたルネを見送っていたが……元まで濃く朱が差していたのは見間違えでは無いのだろう。
……多分。

俺はルネが用意してくれた服に着替えて、下の酒場におもむくのであった。

事の始まり、ルネが何故あそこまで控えめだったかは……後々嫌でも分かってしまった。

ルネ……服のセンス無さ過ぎだぞ………。

第11話..過去、今、自由

酒場は騒然としていた。

カウンターには、超凄い人ばかり。
その中心には……

「はっはっはっはっ!! 俺はこんなじゃ倒れねえぞ、どんどん持って来い!!!!」

……プラインだよな、この声。

んと、そのプラインを中心とする集団を遠巻きに見ているルネを見つけた。

「何が、どうなって、ああなったんだ？」

「知らない、私が降りてきた時には既になってたよ……」

どーでもいいよ、とばかりに俺に視線を送ってきたルネが…

「……ごめんね」

唐突に謝ってくる。

「何?」

「……でも、可愛いから許して?」

なるほど、と俺は理解した上での返答。

「いや、いいよ。気に入った。不幸中の幸いとも言えるけど、俺ウサギさん大好きだから」

先ほどルネがくれた服は、服そのものは問題が無いのだが……どうも胸部に可愛らしい”ウサギさん”のプリントがある。

実際、ウサギさんは嫌いでは無いので、何を言われようが平常心。俺が良いと言うのだから大丈夫、問題は無い。

現実(?)の学校での態度のように卑屈な自分で居ればいいのだ……”卑屈な自分”……自分で言うておいて、自分を嘲笑う。あざわら

自由に素の自分を出している”今の自分”から見ればどこまで滑稽こっけいなのだろう……。

あんな自分だったのは周りのせい、俺のせいじゃない――。

最初、努力はした。

色々な事を率先してやり、普通なら嫌な事も平気な顔でやった……。しかしその努力は報われず周りには俺を忌み嫌う、遠ざける、のけ者にする……孤独にする。

結果、俺の心は冷たくなり、睨むのが癖になり、最初よりも悪くなつた。くせ

ただ他人よりも勉強が出来ただけで……運動が出来ただけで……それの何が悪い。

よくよく思い出してみれば、入学早々の学力診断から即効で周りから嫌われ始めたんだっただけ……。

しかし……変人と言うのは居るもので、何故かめげずに俺に話し掛けて来ていた奴もいた。

昨日……でも言うのだろうか、帰り際に俺に話し掛けて来た……”

佐久間稔里”だけであった。

佐久間が積極的に俺に接して来たのも、そういえば学力診断の後く

らいからだったな……。

……………何故だろう……………??

まあ話が変わっていたが、なんだかんだ言っても、不良にはならなかったな……。

だから、自分で言うのもなんだが、他人に迷惑だけは掛けてない。と言うより、自ら極力、他人に接触しないようにしていたんだろう。

あの、周りから見放されたと実感した日…俺は一つの結論に達した。

『他人の荷物は持ちたくない……もちろん、俺の荷物は持たれたくない』

『くだらないな…いっそ、世界なんて消えて無くなれば良い……』

こんな2つの言葉で表されてしまった。

なんとも幼稚で我侖^{わがまま}で愚かな言葉だろうと今は思う……。

「え、どうしたの？　ホムラ……??」

「うああ、あ、あ？　……ん、な、何？」

ビクッ！　とまでなったんだ、大分物思いに耽^{ふけ}っていたんだろう…。

「なんか、荷物がなんたら……世界がなんたらって眩^{くら}いてたからさ……」

うわあ、思っていたことをそのまま言葉にしていたらしい。

「いや、なんでもないよ、ごめんな」

「ううん、いいけど…、すっごく怖い顔してたから、大丈夫かなって……」

『そっか、心配してくれてありがとう』

また、満面の笑顔をルネに向けた。

……そうさ、今は地球じゃない、ここは「テラ」だ。

”あの世界”じゃない、”あの生活”じゃない”あの自分”じゃない”あの自分”じゃない……。

ありのままの自分、本当の自分で振舞ってもいい。

俺は今、一種の”自由”を手に入れたのだろう。

この世界はこの世界なりの”不幸”や”苦悩”、”災難”が待っているかもしれない。

だが、もしも明日、明後日、あさって明々後日と、この世界での生活が続くのであれば、幸せを噛み締めつつ、悔いの無いように生きて行きたいと、思っていた……。

「だっはっはっはは……んでよ、さっき部屋でそいつとアイツがイチャイチャイチャイチャしててよお…俺が入る隙間なんてこれっぽちも無かったわけよ!!」

………今、聞いているイケナイものを聞いてしまった気がするが、気のせいかな???

正面、ルネはグルンッ!! と首を回し、プラインの方を直視。その顔は引き攣っていた……。

「へへえ、アイツと、あの娘がねえ……」

同時にプラインの集団は一斉に俺とルネの方を、値定めするような目つきで見られた。

「そうだよ。　しかもなあ、地味にあれの方が意外と積極的にアイツを……」

俺とルネは「行き先…プライン」の表示をして、同時に猛ダッシュ！！！！

ほぼ同時に人ごみを蹴散らし、同時に左右からプラインの胸倉を掴み、同時に頭を殴った。　……グーで。

「それでは皆さん、また明日」

「ご縁があればまた会うでしょう」

片方ずつ、プラインの肩を引っ張り、プラインを引きずった状態で、2階の部屋に向かった。

泥酔まではしてなくとも、プラインの顔はずいぶん赤かった。

プラインのベッドに放り投げ、俺とルネは「おやすみ」を言い合い、お互いベッドに横たわった。

俺はベッドの中で、『明日、目が覚めた時出来ればまだこの世界に居ますように、この世界が夢でありませんように』と密やかに祈りつつ、呆気なく睡魔に襲撃され陥落、意識は途絶えた……。

第12話：旅立ち、戦闘？！

穏やかな日差しが閉じた目の闇をチラチラと瞬くので、仕方なく俺は目を開けた……。

今まで俺はベッドに寝ていた。

起き上がると、見慣れない毛布、木目バリバリの木製ベッドに寝ていた……。

俺のお気に入り、ウサギさんの布団はどうした。

と、冗談はさておき（ウサギさんの布団はホントだが）……なんだかんだで何一つ情報が頭の中で整理できていない……そんな時間が無かっただけか？

俺は掛け布団を被ったままベッドの上にあぐら。もうプライン達は起きている。

さてと、まず……”テラ”って何よ？

異世界だと？　なめるな、そんなモン存在していて堪るか。

もしや、現実の俺はどっかから配信されている催眠音波にでも汚染されたのだろうか……？

……とりあえず、現状の確認だ。

ここは、確かチェンク、シンセプトと言う国の最西の町。

この世界では人が10種くらい居るだか、居ないだか……。

俺は誰かに予言されて、この近くに流れ星として落ちてきた、と……。

ここではよくある冒険RPGに出てきそうな”魔物”と呼ばれるモノが存在する。

そして、俺としては最も重要な事、それは……。

俺が、プラインとルネの”足手まとい”と言う事…。

情けない、自分が情けなさ過ぎる。

もしこれが俺自身の夢ならば、大分俺はマゾヒストな傾向があるのか？

まあ、現実世界…：俗に、と言うか名付けて「ガイア」と、この世界「テラ」はどっちもどっち、根拠とかは無い…。

現実世界「ガイア」で過ごしたほぼ16年の記憶が夢、とか等も考えられるが、それは無いだろう。

結局は現状維持、地球に帰れるとは思えないけど、もしかすると…：など、可能性はある。

俺は生きているんだ、生きてれば可能性なんてどんなに小さくとも0ではない。

なんというセオリー通りな台詞だろう。だが、だてにセオリー通りなのではないのだろう、使い回されてはいるが花丸をあげたくなるような模範解答だ。

とりあえずはこのままプラインとルネに流されるままに行動してみるか…。

見計らったかのようなタイミングで部屋のドアが開いた。

「おゝい、起きたか、寝坊助。ネボスケ　つか寝てても起きろ、昼飯食うぞ」

「寝坊助なんてひどいよ。　ホムラは昨日いきなりテラに来たんだし、すぐライの鬼地獄特訓したんでしょ？　昼まで寝るよ、普通」

「…：もう、昼なのか？」

窓の外を見ると気持ちいい晴れ。

燦々^{さんさん}と真上に陣取っている太陽は順調に熱光線で地上を照らしている。

着替えようと布団を避け、ベッドから降りるとプラインの爆笑が響いた。

「何笑ってるんだよ」

「いやっ、でもっ、それ……お前の着てる、その服のまえっ……」

腹を抱えて爆笑しているプラインを尻目に自分の胸部を見る。

「……これが、このウサギさんがどうした？」

平然と言ってやった。

「え……?..?..?」

俺の一言でプラインが固まった。

「いいよね、その刺繡^{ししゅう}、そのウサギさん可愛いよね！」

何故か慌てて叫びに入り掛けているルネの言葉……。

「ああ、可愛いと思うぞ？」

「わあああああい!!」

ドスッ！ と俺の腹にルネの頭が突撃、イタイよ……。

「そ、そうか……そういうこともあるんだな……ホムラ、お前のおかげで世界が広がったよ」

はしゃいでいる(?) ルネとは裏腹にプラインはどよん(?)
と明後日の方向を見て溜息。

「まさか、ホムラがルネのセンスに着いて行っていたとは……?」

しゃがみこむまでの激しいリアクションをしているプラインに対し、俺は頭の上に疑問符を3つ

「……何がダメなんだ???」

「ねえ、いいよねえ。ウサギさん可愛いよねえ」

ルネが相変わらず突撃した拍子に俺に抱き付いてるし……プラインはドアの縁に凭もたれてしゃがみこんでいるし……もう、なにが何なんだ??

○○○

「……あのう、すみません……」

突如開け放たれていたドアから沈黙を破る弱弱い声。

「昼食の用意が……出来たので、お呼びに、まいりました……」

やけに齒切れの悪い台詞を発したのは、色黒で、耳が細長く鋭い15歳くらいの少年だった。

「ああ、そうかごくろう、他に用が無いならさっさと消えろ」

答えたプラインは「素っ気無い」や「冷たい」などを通り越して、『憎悪』や『怨恨』を相手に向ける様な口ぶりであった。

そのままプラインはワザと少年の肩にぶつかりながら1階に下りて行った。

「ありがとね、まあ……気にしないほうがいいよ、ドンマイ♪」

うって変わってルネは、お気楽にもプラインの突然の変貌をスルーしつつ、少年を励ましプラインの後を追って1階に下りて行った。

「だ、大丈夫か？」

「いえいえ、お気になさらず！」

心配してやったのに避けるように行ってしまった。

この世界にも黒人差別的なものがあるのだろうか……。

そういえばここでは色々な種族があるんだった、説明してもらった内のどれだろう？

多分ルネから説明してもらった中には居ないだろうな。

だって人間と天使と龍しか聞いてないし……。

そんなことを考えながら俺も、腹の虫が鳴いているのを聞き届け、1階に急いだ。

○○○

こんな田舎ばいと馬鹿にしていたのに、出てきたパンと野菜のスー
プは絶品だった。

適当に腹を満たした俺たちは、首都シンセプトに向かうべく地味に
お世話になったチェンクを後にして、現在東へ東へ街道を進んでい
た。

今は徒歩だが次の町であるトルメリアは少々大きい町で、馬が借り
られるそうだ。

ちなみに治安が悪かったというのは一時的なもので、プラインが酔
っ払っていたのは作戦で、チェンクの男たちと一度酒を飲み交わし
て仲良くなったらしい。

ところで、もくもくと順調に進んでいたのだが、普通に地味にさっ
きまで平和だったので一つ忘れていた。

確か、「魔獣」だったけ？ 「魔物」だったけ？ この際どーでもいい
や……。

さてと、この目の前に居る、牙が太くて鋭い、涎よだれがダラダラの紫色
の狼が3匹……俺たち、襲われてるの?!!

第13話：初勝利後の断末魔

「ホムラ、気をつけろっ!!」

「あぁっ!」

特に指導はされていなかったのだが、昔の記憶が蘇り、自然に腰の剣を抜いて狼の攻撃に備えていた。

あのバカ親父のおかげで幼い頃から反射神経は人並み以上に備わっているつもりだし、あの家では常に気を張っていないと、どこからともなく叩かれてたしな……木刀で。

まあ、親父が海外出張で家を出るまでだったけど……。

今持っている剣は訓練時のとは違い、緑がかった色の鉋物で作られたと思われる物で、訓練時のより小振りでリーチは狭くなったのだが、その分とても軽量で扱いやすく、今対峙している素早い狼に充分対応出来るものだった。

こっちが丁度3人でよかった。現在はそれぞれ1対1で戦闘していて、プライン、ルネ両名は立派に攻防していた……のだが、俺はと言えば、ずっとずっと、ずっと相手を警戒し続け、7mくらいの間を空けながら牽制^{けんせい}していた。

にらめっこ状態に陥^{おちい}ったが、時折痺れを切らせた狼が突進しつつ噛み付いてくるのを、受け流しつつ反撃の機会を窺^{うかが}っていた。

しかしながら、日頃鍛えていない足腰に加えて、昨日はルネの言葉を借りればプラインの”鬼地獄特訓”をやった。

ろくにマッサージをしていなかったから、実は今朝……じゃないな、起きたのは昼だ。ま、とりあえず起きたときから筋肉痛がヒドかった。

そんな状態のただの人間の16の高校生には、せいぜい狼の突進噛み付きを7、8回受け流せば、そろそろ身体にガタが来てもおかしくなかった……。

狼の通算10回目の突進で、ホムラは受け流すことが出来ず、モロに喰らった。

「ガハッ……!!」

とても大きくはない、せいぜい大型犬くらいの狼が繰り出した突進は、とてもその体格からは想像出来ない衝撃がホムラの横腹の走り、草が生い茂る街道の隅に吹っ飛ばされた。

太陽の光を化学繊維が反射させ、キラキラと煌いていた新品同然の制服は呆気なく砂汚れで輝きが曇る。

プラインたちは気付いていないのか、心配するような声は聞こえない。

一瞬意識が飛びそうになったのだが、かろうじて剣を手から離さなかった自分の執念に感謝した。

「くそっ……やっぱこのままじゃジリ貧か……覚悟、決めないとな……」

一度深呼吸して悲鳴を上げる身体と痛みを訴える横腹に叱咤^{しった}し標的、横腹に突撃をかましやがった狼を正面に捉え、構えた。

イノシシの様に前足を何回か掻いて相変わらず狼は突進してきた。チャンスは一回……タイミングを間違えれば、今度は横腹辺りを食い干切られて持てかれるだろう。

決定打を決める為に、リーチの短さと軽さによる衝撃の減少を考慮するのだから結構接近しなければならぬ。

今まで感じた事のない重圧感と恐怖に駆られるが、自分の命が関わるのだ。

思考する言葉は一瞬で行き交い、不安99%、余裕少々の面持ちで剣を両手で持ち、正面に構えなおした。

5 m……4 m……と狼は接近してくる。

ふうふう……と息を吐きながら、静かに身体を左に捻^{ねじ}る。

3 m……2 m……

すっ！ と短く息を吸い……

1 m……！！

狼との距離を見据え、一閃！！！！

左に捻った身体を右に返しつつ、正面の狼の右側へと通り抜けた。遠心力を加えながら通り抜けた斬撃は、一つの生命を絶つのに十分だった

ワオオオオオオオオオン！

断末魔の叫びを上げる狼を余所^{よそ}にホムラはその場に倒れた。

……意識など最初から途絶えていたかのような格好で。

○○○

パチパチパチ……

何かが爆^はぜる音にホムラは目を覚ます。

うつすら開けた目にどこか暖かな焚き火が視界の隅に映った。
空は濃い藍色をしており、既にこの世界は夜の時間帯なのだと感づいた。

「おう、起きたかホムラ」

「ああ……プライぬがつ!!」

寝かせられていたので起き上がろうとしたが、激痛がそれを阻んだ。

「かまわねーから寝てろよ。初めての戦闘だ、相当疲れたろ？」

「ああ、特に実践訓練なんてしてなかったしな……道中平和だったから氣い抜いてた」

「しっかしなあ……ホントに実践訓練なんてしてない筈なのに、一人で倒しちまうとはな……」

「ん? ……何か余裕ある発言だな……まさか俺がピンチだったのに黙って見てたとか？」

「あ、ああ、それについては悪い、謝る。すまなかった」

内心冗談だったのだが……頭を下げるプライン……。
……ホントに黙って見てたのかよ。

「いや……気にしてないけどさ。今、生きてるし」

「そうか、良かった。けどな、この辺りで一番強いのがあのキラ
ーファンダだからな、一人で倒せるなら安心だな。食料的にも」

「あの狼って、食えるのか？」

「ああ、調理の仕方が変わるが、基本的に美味だし炙れば保存も利
く」

「なるほど……」

「それにな、牙やキモも多少高値で売れる、もしもの時の金になる
んだ」

「ライ、ホムラ起きたあ？」

プラインの説明を聞き終わった所で焚き火のほうからルネの声が聞
こえてきた。

「ああ、起きはしたが、ホムラ今日は動けないぜ」

「ええ、ホント？」

肩鎧をした上にエプロンを着たルネが接近してきた。……俺を目指して。

俺が痛みで動けない事を確認するように、ルネは俺の右腕を持ち上げた。

『ぎゃあああああ!!!!』

まず腕を動かす支点の肩、続いて微妙に曲がった肘、最後に勢いに乗せて動いた手全体に激痛が走った。

俺の声に驚いたのかルネは持った俺の腕を落とした……ひどいよな……。

俺の悲痛な叫びは天に届かず、非情にも俺の腕は地面に落下し、衝突した……。

『うぎゃあああああああああ!!!!』

……と、チェンクとトルメリアを結ぶ名も無き街道に、突如大音量の断末魔が木霊したのは言うまでもなかった……。

第14話：翔歌油

「しゅっぱーつ、しんこう！！」

朝。

元気なルネの掛け声と共に俺たちは行軍を再開した。

全快には程遠い俺を気遣ってくれたプラインたちは、俺の歩くスピードに合わせてくれて、トルメリアに着いた頃にはもう日が落ちていた。

あれから何の心配もなく、襲撃もなくトルメリアに着けたのは幸運だった。

水の街トルメリア

首都シンセプトの周りを囲む神山ティタルフィアの聖流トルミリオ川がこの街を横断しているのが由来。

聖流の加護でこの街は今まで一度も水関連の事件事故が起こった事が無い。

その水は濁ることなく、大雨が降っても洪水は起こらず、日照りが続いても枯れる事は無かった。

その水を毎朝コップ一杯飲むだけでどんな病気も治ったり、万病を防いだり……まさに奇跡の産物、神想結晶フリンダのおかげ。……だとか

今のは全てルネの観光案内ガイドよろしきな説明の受け売りだ。

茜色に染まる西の空をのほほんと余裕で眺めつつ、今日も何だかんだで辛くもあり、楽しくもあったなあ……などと、感傷に浸る。

という俺の希望は儚く散ってしまった。

全てはあの昼に食べた『エタイン・シレナイクロイモノ食い物？』が原因だった……。

○○○

チェンクとトルメリアを繋ぐ街道で、その時に徐々に迫っていた。

太陽は依然として燦々さんさんと俺らの真上から大地を照り付けていた。

つまりは既に昼の時間帯なのだ。そろそろ前を先導して歩くどちらかの腹の虫が泣き始めてもイイ頃……。

グウウウウウ……

程よく余韻を残した大音量は……ごめんなさい、ギブです。参りました。

擬音として「ニヤニヤ」と前の二人から聞こえてきた気がした。

……気がしたただけだよな？

すると突然ピタッ！と歩みを止めた二人が同時にゆっくりこちらに振り向いてきた。

しかし、その顔は俺の勘を見事に外し、二人とも似たような切ない顔……簡単に言えば「腹が減った顔」をしていた。

「……………」

「……………」

「……………」

プラインとルネと俺の間で意味深な沈黙と目配せがあり、そのおかげで……。

「てなワケで、昼飯にするか！」

というプラインの口から何とも魅力が溢れ出す言葉を導き出した。

街道を少しそれると、雑草が所構わず生えている「ある意味で荒地」が広がっていたのだが、運良く雑草が少ない場所を見つけ、レジャーシートのようなものを広げた。

昼飯としては主にチェンクで買ったパンなのだが、それだけでは味気ないと、昨日倒した狼の肉を焼いてメニューに加えるはずだったのだが……。

原因その1

「はいはい、私がお肉焼くっ！」 ……実に短いセリフだった。

「ええ?!」 ……とプライン。

今思うと、多分プラインは勘付いていたのだろう。

しかし、身近な者にほど油断するという言葉通りだったのだと俺は信じていたい……。

原因その2

「隠し味に、これを数滴……」 ……聞きはしたが、脳が理解、反応するのは遅かった。

無事に焚き火が完成し、火もついた。その後だった……。

俺とプラインが少し、ほんの少しの数秒で事態は一変していた。
気が付けば焚き火の心地よい弱火は……逆巻き、炎上していたのだ
……。

俺は慌てて消化活動に専念し、ルネはプラインに押し付けた。

原因その3

「ぐはっ……」 ……今ならあの時の自分を軽く張り倒せるな。

何故だ、何故なのだ。 何故あれを……あの『エタイン・シレナイクロイモ食い物?』を口に
したのだろう???

……多分ルネの態度のせいだろう。

激しくしょんぼりしてしまったルネを元氣付けようとしたのか、俺
たちを思ってしてくれた事なのだろうという思いなのか知らないが、
当時の俺は禁忌を犯していた。

毒々しい黒紫色をした「元、肉」は、表面がパリパリで中はじわあ
と肉汁は溢れてくるという、聞いているだけであれば、中々食欲を
そそる表現が使えるのだが……意外と味も良かった。 正直すんご
く美味しかった。 警戒もせずにバクバク食べた。

……プラインの顔は引き攣っていたが。

……それが悲劇の始まりだった。

腹も膨れ、俺だけ意気揚々としていたのだが、それもそのはず、あ
の『エタイン・シレナイクロイモ食い物?』を食べたのは俺だけだからな。

その話は置いといて、昼を食べて行軍を再開して約1時間が経過し
た辺りで異変に気付いた。

この場所の気候は穏やかでちょうどいいポカポカの20℃くらいと
予想できる気温なのだが……

「ん？」

左手が震えている。

特段寒いわけでもなく、筋肉が強張っている訳でもなく……って、あれ??

いつの間にか左腕の感覚が無い。……まるで麻酔を打たれた様な感じ？

おかげで左腕はプラ〜ンとただ肩から垂れ下がるだけ。

……え？

俺は内心超焦った。俺の身体はどうなった?!
気付くと右腕の感覚も薄れてきている気がする……。

「ル…ルネ…ちょっと聴きたいんだが」

「…な、なに？」

俺の声色と表情で悟ったのか、おずおずと上目遣いで見つめて来た。

「結局さ、『アレ』って何入れたの？」

「……………」
『翔駄油』……………」

「おまつ、あれ翔駄油だったのかよっ!!」

どうやら聞き慣れない調味料のようだ。

「翔駄油って……何？」

「珍鳥オクサーダっていう魔獣からとれる油でな、適量使うと筋肉に関する効果を持つんだが、摂取しすぎると……」

「しすぎると……?」

意味深な語尾を残すプラインに対し、生唾を飲みながら聞き返す。

「量にも寄るが、全身感覚麻痺。下手したら痙攣^{けいれん}で丸一日は動けないぞ」

その言葉を聞き終わった瞬間、背中から溢れ出す冷や汗は脂汗へと変わっていった。

多分表情も一瞬にして凍りついたのだろう。

察したようにプラインが慌ててルネを問い詰める。

「お、おいルネ、お前どんだけ翔駄油入れたんだっ!!」

「ええ………つとお………5滴?」

十二分に間を取ってからルネは白状した。

「はあああああああ?!!」

直後、プラインの絶叫が鼓膜をスルーし、頭に直接響いた。

「ちよ、おまつ、1滴ですら多い翔駄油を……ごっ、5滴………なっ!」

驚愕の声と共にさらに驚愕の声を上げたプラインの目線は……俺の

左腕？

「お…遅かったか……しゃあない、トルメリアまでそんなにないしホムラは俺がおぶってってやるしかないか」

頭の上にクエスチョンマークな俺にプラインは的確に俺の腕を両方指差した。

………左腕が痙攣シテイル。

………右腕も痙攣シテイル。

この俺の怪奇現象を探るのに夢中で右腕が麻痺していた事を含め、両腕が痙攣している事に気付かなかった。

「多分そろそろ足の感覚もなくなって来始めてると思うぞ？」

プライン正解。既に膝を曲げる事が不可能なまでだった。

こうして、その後全身ビクビクしっぱなしだった俺を器用におぶってくれて、何とか日が落ちる前にトルメリアに着いた。

第14話：翔駄油（後書き）

またまた一ヶ月空いてしまいました。
すみません。

こんな謝罪の跡に何なのですが、「この小説をより良い物に」という大義名分掲げつつ、本より私自身の成長のため、出来れば駄目出し、もとい評価、感想がありましたらドシドシ書き殴って貰えればと思います。

是非とも、これからも宜しくお願いします。

P・S・ 更新速度が遅い作者であります、見捨てないで頂ければ恐縮です。

第15話：淡き想いへの応援

「にしても、見渡す限り平原が続くんだなあ……」

太陽の光が心の中にまで降り注いできそうな、超気持ちいい晴れ。その穏やかな気持ちで今、俺はテラの風になっている。……というのほただの比喻で、俺たち3人は馬に乗りながら、次の街シュバリンツへと向かっていた。

テラはガイアに比べ、大地の起伏が穏やかで丘などはほとんど見受けられず、山は山とはっきりしている。

地平線まで見渡せる開放感が心地よい。

「ホント、世界中がこれほど平和であればいいのになあ……。ま、俺たちの仕事が無くなるのは困るけどな」

翔駄油の焼肉を食べた俺は、あの後いつの間にか気絶し、知らぬ間にトルメリアに着いていた。

とりあえず宿を取り、ベッドに寝かせられた俺は、薬屋で売っていた消化促進剤を飲まされ、そのまま次の日まで目覚めなかったと言う……。

翔駄油で、消化促進剤が効くものなのか？

そこはかかないその疑問は胸の内にしまいこむ事にした。正直に言えば、ツツコむのが面倒だったからだ。

「この馬のおかげで飛躍的に移動速度が上がったからな、シュバリンツまでは多分昼頃までには着くだろ。シュバリンツでちよつと用事あるけど、終わったらすぐその足で次の町に行こう」

少々その用事に興味が出たが、俺が聞いたところでわからんだろうから何も口にせずに黙ると俺たちの会話はしばらく止まった。

経済都市 シュバリント

シンセプトの中で首都に次ぐ広さと人口を誇る中心的経済都市
シンセプト各地の町や村につながり、大通りは常に人の行き交いがあるという。

シンセプトの国王の王女様の屋敷があり、その名前が街の名前の由来と言う、なんだかなあ……な都市。

「おお……」

俺は素直に感嘆した。

この街並みこそ中世ファンタジーを連想させる石造りの街だ。

先に立ち寄ったチェンクは完全に木造で、トルメリアも水路と道は石で整備されてはいたが、建築物は概ね木造だった。

「しっかしまあ……門であんなに手間取るなんてな」

この街に外側は全て城壁で囲われていて、入るときには門番に厳重なチェックをされ、それでも許可が下りなかったためプライン達が騎士団である立場を利用し、なんとか納得させて入ったのである。

「んじゃ俺はリーナ様の所に行ってくつから、ルネはホームラ連れて北門に行ってくれ」

「はいはい、いってらっしゃい。いつもの事だけど早めにね」

どこかルネは悲しそうな、寂しそうな顔だった。

〇〇〇

『そういや、さっきのリーナ様ってのが王女様？』

プラインと別れ、ルネに連れられるまま北門へと向かっている途中に聞いてみた。

「ああ、うん。 「ヴェルリーナ」 シュバリエ様。 国王ヴェルヒム様の子女で、すんごいワガママな性格だけど自分の仕事はきちり責任持って遂行する人」

「へえ……」

「けどね、その代わり戦いはめつきりダメでね、半年ごとに騎士団の騎団と弓団の軍1つずつを護衛に回されちゃうの。 危なかったんだよ、今年は私が率いてる軍が護衛になりかけたんだから！」

「まあ、姫自ら戦う必要は無いわな。 ヴェルリーナ様の事嫌いな の？」

「嫌いってワケじゃないんだけど、あの人って人の事こき使いすぎなんだって。 自分の親衛隊にさせればいい事もこっちにやらせるし……」

ルネの態度を見れば、なにやらそれだけの理由で敵意向けているわけでは、なさそうだが……。

「それにね、あの人はライの事を気に入ってるの……」
なるほど、と心の中で納得。

この街の中央には噴水を設けた広場があり、ルネが無言でベンチに座ったので俺もそれに倣って隣に腰を下ろした。

「前にね……」

しばらく黙っていたルネだが、唐突に話を切り出した。

「前に、ここの護衛にライの率いてる隊と私が率いてる隊が同時に配属されたの……。初めて見た時からいい印象は受けなかったわ」

この手の話の切り出し方は陰鬱な話と相場が決まっている。
てなわけで、聞き手に回った。

「私たちが護衛に配属されて2、3ヶ月くらいしたある日、偉い人たちが集まるパーティーがあつてね、当然護衛に駆りだされてライがその総指揮を任されたんだけど……」

大体は予想が付く。姫様の立場、性格とプラインの立場、性格、それぞれをヒントに考えても、多分……

「ライは、より確実に護衛できるようにって、あの人の側に居たの。剣も持たずに……」

……やっぱり。

「私も一応その場に合った服で会場の警備をしてたけど、ヴェルリーナ様がライの腕を取って楽しげに話してるのを見たら、その……なんと言うか……」

「要は……嫉妬だな」

「えっ!？」

突然口を開いた事に驚いたのか、発言の内容に驚いたのか、ルネは素っ頓狂な声を上げた。

「つまり、ヴェルリーナ様に対して妬いてるんだろ？」

「そんなことないっ! ……と思う、けど、その時からあの人はライに言い寄ってて、しかも護衛の期間が過ぎた後でもシュバリンツンに来るたびに屋敷に寄れなんて事命令して……」

激しく抗議しつつ、どんどん言葉に力がなくなっていくルネを横目に色々と思った。

小さい頃からプラインと一緒にいるのにそういう気が起こらない方がおかしいと思うし、いつもはあんな元気に振舞っているけど、内面は落ち込みやすい性格なのだと、少しだけルネの事を理解できて良かった。

「ふう……。しかし、相談とか昔話を聞かせるなら……人を選べよ?」

「え?」

ルネは俺が元の世界でどんなに周りから嫌われていたか知らないの
で無理も無いが……。

「俺はな、恋愛なんか縁がなくてな、そういうことへの助言は出
来ない。けどな……」

俺は立ち上がりつつ、言っていて自分が少々悲しくなったが、一つ
一言葉を選び出す。

「けど？」

俺を見上げるまだ幼い可憐な顔立ちのルネに言ってやった。

「恋愛なんてな、早い者勝ちだ。悔しいならさっさとプラインを
掠め取って、ヴェルリーナ様に目に物見せてやれ」

眼鏡をクイツと上げて微笑んでやる。

「あ……」

何かを悟った様に、答えを導き出した様に顔がぱあっと明るくなる。

「そうだよな、例え相手がヴェルリーナ様だからって、負けないん
だからっ!!」

勢いよく立ち上がると、ルネは雄叫びのように叫んだ。

「まあ、こうやって答えを見つけて万々歳な時に言うのもなんだが
……結局はプラインのこと好きなんだろ？」

「あううう……そつ、そんな事より早く北門に行くよ！」

「ふふつ、応援してるよ」

唸りながら耳まで赤くしたルネは完全に照れ隠しの要領で勝手に一人で行ってしまう。

そんな光景に微笑ましく思い一人、本人に聴こえるはずも無いエールを囁いていたのだが……。

「ちょっとまってよ……」

ルネの背中を見失いそうになってから冷静になり、気付く。

俺、このままだったら迷子になるって!!

慌ててルネを追いかけるのであった。

○○○

その後、2時間位して帰って来たプラインに即効で抱きついたりしているルネを見て苦笑しつつ、再び馬を駆けて次の町カーリンに向かった。

俺のルネへの細やかな応援もとい提案で馬の数は2頭に減った。

ルネとプラインが同じ馬を駆るという案だったのだが、プラインは「まあ、経費が軽くなるなら」と承諾してくれた。

そんな俺の心配りに感謝という形でこっそり俺にお礼と俺の頬にキスをして来たのだが、プラインがその場を発見し慌てふためいている姿を見て内心俺はほくそ笑んだ。

結局、何だかんだ言ってもプラインの方もまんざらでもないんじゃないかな？

そのプラインの反応にルネも気付いたのか、今日一日はずっとご機嫌だった。

話を元に戻して、カーリンまでの道程はそれほど長くなく、日が落ちる頃には何とか着けた。

第16話：想像魔法（前書き）

今回、16話を更新しましたが、それまでに長い期間を空けてしまいました事を、この小説を読んで頂いている読者様に、作者からお詫び申し上げます。
すみませんでした。

第16話..想像魔法

正直、まだ全然慣れていない目覚め。

起きるのが常に慣れ親しんだ自室ではないという現実には、いつも胸を撫で下ろす。

……で、今回は澄み切った青空が目飛び込んできた。

規則的で心地よい揺れに、二度寝しかけた自分を叱咤し上体を起こす。

「おうホムラ、今頃お目覚めか」

後方からプラインの嫌味が襲ってきた。

「いやいや、昨日ホムラに特訓しといて、それはないよね?!」

プラインと同じ馬に乗っていたルネがフォローをよこしてきた。ルネの発言を聞くまですっかり忘れていた。

「そうだ……そういや、なんかやったな」

「おいおい、まさか忘れたとか言うなよ?」

冗談じゃない、という顔をしているプライン。

俺はそこまで物覚えは悪く無いぞ。……興味が無いもの以外はな。

「なんだっけ、飛刃^{ヒジン}……だっけか?」

言いつつ、剣をテキトーに振る。

すると、斬った方向に弓なりの形をした斬撃が飛んで行き、程なくして霧散した。

「よし、これでホムラも一応戦力として見られるな」

「だが、やはり頭痛は免れないな……そこがネックだ」

よりの確に「飛ぶ刃」を想像しなければいけないから、高い集中力が必要だし、使った後は頭痛がする。

（しかし、本当に変と言うか、不思議な所に来ちゃったよなあ……）

昨夜の事……。

カーリンに着き、宿を取り、飯を済ませて明日に備えて寝た。

しかし、深夜になってホムラはプラインに起こされ、またもや特訓をしていたのだ。

「ホント、不思議だよな……よりリアルに、ってのは辛いけど想像しただけで色々出来るからなあ……」

「いや、俺たちは生まれた時から想像魔法はあったからな。そこまで不思議には思ったこと無いけど……」

「そんなの俺の世界に無いからな……こんな現象が起こる原理とか構造を知りたいな……」

やはり、好奇心が疼く。

昨夜特訓したのはこの世界でのみ使える（と言う仮説）想像魔法というもの。

その名、文字通り、頭の中で想像した現象を現実で起こすと言う「魔法」そのもの。

この世界の住人ならば誰でも使えるらしく、義王国騎士団ならば自分の得物は出せるらしい。

それに、一人一人特化した能力を持つらしく、プラインは雷を、ルネは風を操れるらしい。

俺の特化している能力はまだ分からず、首都シンセプトにいる、俺がこの世界に来ることを予言した神官に判別してもらうらしい。

独学で訓練も出来るらしいのだが、確実に自分の特性を知っておかないと、テキトーに伸ばされた力のベクトルはふとした時に暴発し、脅威になりかねないらしい。

初めて特訓した時に俺がやった「追風陣」も想像魔法だったという。あの時は、いかにプラインに確実に一発当てるかと言う事を無心で考えていたんだと思う。

「けどな、「武器出し」と「飛刃」くらいなら、特に特化種類を判別できていない状態でも、戦闘するなら実用的だし、初歩だから今のうちにやっておいたほうが良いぞ」

「でも、ホムラって飛刃は出来るけど、武器出しは出来ないんですよ？ 普通武器出しのほうが簡単なのに……」

「それは仕方ないさ、俺はプラインやルネと違って武器に馴染みが無い。つい最近持ち出したんだし、戦闘だって4・5回くらいしかやってないんだ。そんな状態でリアルな想像は無理だよ、まあ、努力はしてるけど……」

そういつて俺は腰の提げた剣の柄頭に手を掛ける。
そこには安心できる重量が確かに腰にかかった。

「んじゃ、ホムラが完全に起きた事だし、馬の速度上げるか!!」
特に確認や同意をさせずに自らが乗る馬の手綱を操り、ぐいぐいをスピードを上げ、あっという間に俺を追い抜いていった。

「……て、待てっ!!! 俺まだ馬の乗り方下手なんだよ、そんな速度出せねーよっ!!!」

またもや俺の叫びは街道に木霊する。
いつになったらシンセプトに到着するのやら……。

第17話..デスグリズリー

「なあ……プライン、本当に、ここで、最後の街、なんだな？」

「ああ、あっちに見えるだろ？　でっけー関所という名の城門が」

今、俺たちはジェイバルというシンセプト最後の砦といわれるらしい城塞都市にいる。

首都に近いせいか、先に立ち寄ったトルメリアやシュバリンツより大きく、主な道路に広がる商店の連なりは人でごった返している。

「にしても、流石にシュバリンツより活気が良いな……」

「そうだな……でもやっぱ首都のほうが、大きいし人もいるしな。何よりここはシンボルとなる場所が無い。在るとしても街の真ん中にある中央砦くらいだな」

なるほど、確かに中央のほうに周りの建物より少々高い建造物があるな。

などと、軽く辺りを見回していると買い物に出かけていたルネが戻ってきた。

「おまたせっ！　遅くなってゴメンね」

「いや、別に近いからいいんだが……もうすっかり日も傾いてるかな、途中に魔物に遭遇しなければ良いんだが……」

「……近いのに遭遇する危険があるのか？」

「この地方は比較的に夜行性の魔物が多くてな……一応グラントピアっていうあの城壁を挟んだシュバリンツとシンセプトを繋ぐラズ街道は一番舗装に力を入れて作られてるから、そうそう出会わないとは思わないが、さっき気になる話を聞いてな……」

考え込むような仕草をするプラインを見て、軽く背筋に悪寒が走ったのは、暗くなるにつれ、じわじわと冷えていく気温のせいだけでは無いようだ。

「それ、私も聞いたよ。おばさん達が噂してたけど……最近この近くでデスグリズリーが出るんでしょ？」

（聞いただけでアレですね、危険な魔物って分かるネーミングだな……）

「ああ、そうらしい。用事は済んだだろ？ さっさと行くぞ」

俺たちは無言の了承でそれぞれ馬に乗り込み、城塞都市ジェイバルを出た。

○○○

（んで……この状況はなんだ……）

グガアアアアアアアアアアアアアアアア！！！

思ったより小さい人型の獣が目の前に存在している。

「なんで、こうタイミングと運が悪いんだよ……」

手早く馬から下りつつ剣を既に手に、デスグリズリーらしき魔物（以下熊）と対峙している。

ルネもプラインに倣い後衛で弓を構えている。

俺も見習いつつ馬から下りると、馬達は途端に來た道を爆走していった。

（やっぱ喰われたくないもんな……）

プライン達に駆け寄りつつ、腰の剣を抜き、熊に向き直り、そちらを見ると……当の熊は既にこちらに接近してきていた。

「散れっ!!」

プラインの合図と共に俺は熊に駆け出し、接触する寸前で横っ飛びに突進をかわした。

「ちっ、ホムラめ、うまくこっちに誘導しやがって……」

突然の俺の動きに対応しきれなかった熊は、俺を諦めて、勢いが消える前に標的をプラインに向けたらしい。

ドスドスとプラインに接近している熊だが、対峙しているプラインは何故か余裕顔。

「ルネッ!!」

「わかってるよっ！」

あと数秒で熊と接触すると言う時にプラインはルネに合図を出し……

バスバスバスッ！！！！

流石「ドラゴンスナイパー」の名を持つだけの事は在るのか、急所
と思われる箇所には3本矢が突き刺さった。

苦悶の表情をしながら熊はルネに振り返った。

……あろう事か、剣を構えたプラインの目の前で。

「はあああああ……ライシュウケン雷襲剣ッ！！」

熊がプラインのさっきに気付き、向き直ろうとしたが……もう遅すぎる。

雷を纏ったプラインの剣は、深々と熊の腹を裂きつつ、焼き焦がしていき、確実に絶命させた。

ズウウウン……と崩れ、屍と化した。

「プライン、これがデスグリズリーなのか？」

先ほど弓をくらった熊のような苦悶の表情をしながら、

「いや、これは……デスグリズリーの幼生だ。こいつあ、面倒になった。グラントピアに急ぐぞ、親が嗅ぎ付けて来るっ！！」

「えっ?! でもお馬さん逃げちゃったし……」

第18話：聖騎士団長

ダンプカーを彷彿とさせる巨軀。
クレーンを思わせる腕。

地を駆る大樹の幹のような脚。

それが、一体となって……俺たちに襲い掛かってきていた。

ルネの射撃で気を逸らせつつ、プラインが懐に突っ込み斬撃を加える。

そして、俺は何もやっていない。……充分に間合いを取ってその巨熊から逃げおおせていた。

つまり、「足手まとい」

しかし、絶望、失望などを考えている余裕と暇なんてない。

ただ、生きるために。

どんなに足手まといだろうと、二人の邪魔だけにはならないように動いていた。

二人の戦術は、最も基本的なものであり、基本的であるからこそ、最も有用な戦術だと思われた。

しかし……どんなに複雑怪奇な戦術であっても、「絶対的な力」には意味を成さない。

まず、ルネの射撃に反応はするが、プラインを懐に潜り込ませる隙がほぼ、無い。

そして、懐に潜り込んだとしても、プラインの持つ大剣を振りかぶり、斬り付ける時間が無く、ほとんどが失敗に終わる。

致命的なことは、もし、プラインが斬撃に成功したとしても、ルネの射撃にも言える事だが……攻撃が弾かれている。

剛毛を着込んだ巨熊は、まるでその皮膚が金属で出来ているかのよ

うな音を立てて、自らに迫りくる攻撃を全て弾き返していた。

これでは、追い払う事はおろか、生き残る確立のほうが遙かに低い。俺も何か出来る事は無いかと思慮を巡らす、持っていた剣も逃げるときに投げ捨ててしまった。

出来る事と言えば……二人の負担を軽減させるために、俺が押さえつけて「俺ごと斬れ」みたいな事も当然出来るはずも無く、押さえつける前に肉片と化すだろうし、それよりも前の問題で、もちろん自殺とか御免こうむりたいし……。

グアアアアア！！

グウウウウ！！

グウウウウアア！！

こちらの消耗なんぞ関係の無いデスグリズリーは俊敏な動きで腕を振り回している。

ここが森ならば、まわりにあるだろう木々は、根こそぎ折れる事だろう。

「くっ……ふっ、うっ……うおっ！！」

（プラインは、よくあんな早い攻撃をかわしてるな……）

しかし、全て紙一重でかわしている。当たってないほうが不思議だ。

「えいっ！ ……ていっ！！ ……はあっ！！！」

その間も、ルネはデスグリズリーに射撃を行っている。

全てその攻撃は命中してはいるのだが、いかんせん全て弾かれているため、ほとんどダメージは与えてないだろう。

それに、デスグリズリーのほうも慣れたのか、ルネの射撃に見向きもしなくなった。

そのため、必然的にプラインへの攻撃が集中してしまう。

ほとんど^{なぶ}罅りに近い状態に置かれているプラインに、何もしてやれない自分に腹が立ち、虚しさが俺を蝕んだ。

今のプラインの状況に、この世界に来る日の前日に光景……意味もなく、先輩達にリンチされていた自分の姿が重なって見えた。

……だが、あの攻防には意味がある。

片方は、自分の子どもを殺された恨み。

片方は、生き残るために。

大義名分といえは終わりだが、どちらも命を賭けての事だ。

しかも、俺はプラインに護られている。

今、プラインが攻撃を受けているおかげで、俺は生きているのだ。

現在進行形での命の恩人に、俺は何もしてやれないどころか、俺という存在自体がこの場には邪魔なのだ。

この上なくやりきれない感情に、飲み込まれそうになる。

気が付くと、いつの間にか俺は涙を流していた……。

「大丈夫だよ、ホムラ。 ライは護りじゃ、騎士団一の人間だから」

横にいるルネに励まされ、嬉しくも、逆に悔しさがこみ上げてくる。

相変わらずのプラインとデスグリズリーの攻防は続いたが、しかし突然、戦局が変わった。

デスグリズリーが唐突に両腕を横一杯に広げ、胸を反らした。

あの動作から察するに、かわし様が無い両腕が左右から同時に迫り来る攻撃だと思った。

その予想はあたり、プラインに迫る両腕……。

反射的に俺は目を瞑っていた……。

「^{ライヘキホウジン}雷壁方陣ッ！！！！！！」

グガアアアアアアアアアアアアアアアア?!!

バリリッ!と流電する音と共に、苦痛が漏れ出ている様な獣のうなり声が、感覚が研ぎ澄まされた俺の鼓膜に届いた。

静かに、そしてゆっくりと、ビクビクしながら目を向けると、そこには……。

夜なのに光り輝きつつ電流を発する壁を境にドヤ顔のプラインと、苦痛に顔を歪ませているデスグリズリーの姿があった。

雷壁の出現に怯んだデスグリズリーを、プラインは見逃さなかった……。

「うおおおおおおおおおおおおつっ！……！
ライシュウソウジンケン
雷襲蒼塵剣ツツ！……！

雷壁を突つ切つて駆け出した勢いを乗せた渾身の逆袈裟斬り。

バ
ア
ア
ア
ア
ア
ア
ン
ツ
ツ
ツ
！
！
！
！

その瞬間、青白い雷そのものがデスグリズリーに落下した……。

[illegible]

ドッスウンッ！！！とその場に倒れて痙攣けいれんを起こすデスグリズリ
 ！。

肩で息をしつつも、達成感溢れる笑顔でこちらを向いているプライ
 ン。

最初は、何が起きたか理解に頭が着いて来なかった。

「よっしやあああああああ！！！　勝ったあああああああ
！！！！！！」

デスグリズリーの咆哮に負けず劣らずな、プラインの絶叫に「生き残った」という実感が湧き、その瞬間、体中の力が抜け、俺はその場に崩れ去った。

「……て、大丈夫かよホムラ。俺なんかよりよっぽどダメージが多く見えるぜ？」

「ああ……」

マヌケな返事しか出来ず、しかし、そんなことも気にしないほどに安堵していた。

「酷かもしれないが、早く行こう。殺したわけじゃないから気が付けば、また襲ってくる。どんな状況でも、もう無理だ」

そうだな、と返事し、立ち上がりグラントピアに「三人」で向かった……。

「でも、プライン。あんなの使えるなら、なんで最初から使わなかったんだ？」

「ああ、あんな見た目派手でも、体力が少なくなっていると、気絶させられないんだよ。だから、腕を振り回させて体力を削ったんだ。まあ、本当ならもっと体力を削りたかったんだが……」

「あれでも充分じゃないのか？！」

その場に崩れ落ちる巨獣と俺。
そこに駆け寄るルネ。

見た目よりダメージが無かったのか、這うように近づいてくるプライン。

巨獣の返り血を浴びた俺の身体は重く、もう立てそうに無かった。

俺に寄る二人の横で、まだ絶命していない巨獣が唸りつつも立ち上がった。

ああ、もう死んだな。 どちらかといえば短かったな、俺の人生。
……などと考えた。

巨獣も、もう死にかけなのだろう。
全身を振るわせつつ腕を振り上げ、俺たちに振り下ろされ……

ライホウヒメイザン
「雷崩飛鳴斬ッッ!!!」

美しく軽やかで綺麗な女性の声が、その場に響き渡った。
次の瞬間、巨獣は断末魔の叫びも出せずに、焼き焦げ、切り裂かれ、殺された。

「無事かっ?! 三人ともっ!!」

声に違わぬほど、整った顔立ちをした女性がグラントピアの方角から駆けて来た。

「シルファ団長ッ?! どうしてここに……」

プラインが驚愕の声を出した。

「そんな事、今はどうでもいいです。　今馬車が来ますので、それに乗ってグラントピアに帰還します」

プラインと同じくらい驚いた顔をしているルネを見て、ああ顔見知りなのか、と思い、俺は安心して気を失った……。

○○○

がばあっ!!

見知らぬ場所で寝かされていた。

（確か…団長とか言う人が来て……そうか、ここはグラントピアの中か）

「おお、起きたか。　よかった」

先ほどの団長が傍の椅子に腰掛けていた。

「あ……さっきは助けて頂いて、どうもありがとうございました。
えーと……シルファ団長」

「ん？　私は貴方に名を教えた記憶がないが……」

「あ……さっき助けて頂いた時にプラインとの会話で聞いて、それ

で……」

「あの時にはまだ気を失ってなかったのか？　なんとも見た目にし
ては頑丈な身体だな……いや、身体ではなく精神力か」

名前は間違ってたなかった様で、軽く安心した。
そこで、社交辞令での会話を試して見た。

「申し送れました、私はサキモト　ホムラと申します。　以後お見
知りするとは思えませんが、一応……お見知り置きを」

「ふふっ……貴方みたいな礼儀正しい男性は久々に会いました。
私は「シルファⅡリンクス」。　聖騎士団長を務めている。　ふっ
……以後お見知り置きを」

あの巨獣を絶命させた攻撃や、プラインへの接し方で、公私共に厳
格な性格かと思ったが、普段は物腰柔らかい人なんだと思った。

「ここは……グラントピアですか？」

「ああ、グラントピア内の医務室だ。　事情は聞かせてもらった。
貴方が巫女様の仰られていた予言の炎なのですね」

「??……予言したのは神官様だと聞いていたのですが……」

「ああ、女性の神官は巫女と呼ぶのですよ。　それよりも、拝見さ
せてもらいましたが、貴方の魔法は不思議ですね。　聞けば、飛刃
以外は出来なかったと……それなのに、プラインが殺されそうにな
った時に、貴方は魔法を4回もほぼ途切れなくやってのけた……」

「あの時は無我夢中でしたから、もう訳が分からないですよ。ほんとど覚えていないですし」

「そうですか……まあ、明日は入城するのでしょうか？ 明日に備えてゆっくり休んでください」

「あ……ありがとうございます」

医務室から一度出ようとしたシルファ団長だったが、戸を開ける手を止め、またこちらに戻ってきて、

「そうだ、騎士団長として貴方に感謝します。プラインの命を救って頂いてありがとうございました」

シルファ団長は、きりりつとした姿勢の良い直立から腰を折り、俺に頭を下げた。

「いつ、いえいえ、滅相もない。プラインがいてくれなければ、俺は既にあの世にいます。だから頭は下げないでください」

これは謙遜でもなんでもない。素の俺個人の考えだ。
シルファ団長は一度頭を上げ、

「それでも、貴方がプラインの命を救ったのは事実です。本当にありがとうございました」

今度は俺が焦りの声を出す前に頭を上げ、軽く微笑んでから戸に向かい……

「ふふっ……次会う時は、立場が逆転しているかもしれませんよ？」

ではホームラ殿、また会う日まで、さようなら」

最後に意味深な、含みのある言葉を残して彼女は、部屋を出て行った。

しばらくして、俺は死ぬようにぐっすりと眠りに落ちた……。

第19話：孤立、救い

翌日。

デスクリズリーに襲われて、命からがら逃げ仰せ、グラントピアの医務室で就寝した俺は、いつも通りに起床した。

そう、いつも通りに……………。

「ほむらあゝ。早く起きて、母さんに朝ごはん作ってえゝゝ」

聞き慣れた悠長な声と共に自室の扉が開け放たれた。その、いつも通りさに、反射的に答えていた。

「いや…………自分で作ってよ。俺も一応昼飯の弁当作るのに…………」

布団に潜り込みつつ、反論する。

「だあゝめっ!! 朝ごはん作ってくれないと、母さん泣いちゃうよ? ……えゝんえゝん」

「だあゝゝ!! そんな芝居止めろっ!! 作るからっ…………今、何…………時???」

布団を完全に剥ぎ取られる前に脱出。

学校に遅れるはずがないが、一応現時刻を確認しようとして…………あれ???

ここは……紛れもなく、咲本家の自室。
通常なら不思議に思わない。　思うはずが無い。
しかし、今は……おかしい。

混乱気味の思考をフル回転させ、原因を考える。

一番有力なのは、今までのが「夢」だった事。

もう一つは、帰ってきた事。

まあ、前者に決まっている。

（本当に笑える……。　俺はいつの間にあんな夢見がちになったんだろうか）

自分への嘲笑を心の中で済ませ、母さんに部屋を出てもらい、制服に着替えた。

「んじゃ、行ってきます」

いつもの朝の挨拶を交わした。　はずだった……。

「行ってらっしゃい。　……焰、夢なんかじゃ……無いわよ」

え？　と聞き返した時には既に玄関のドアは閉まっていた。

わざわざ、また玄関を開けて聞き返すのも億劫なので、釈然としな
い感情を奥に追いやり、我が家の鍵を閉めた。

感覚では、久しぶりのクラス。

しかし、今日のクラスはいつもより騒々しく思った。

それは、ここが感覚として、約一週間ぶりだからと言う理由だけでは無い様だった。

朝のホームルーム。

そこで担任から告げられた事実、少なからず俺は驚愕した。

「えーと、もう皆知っているとは思いますが……佐久間が、行方不明になった」

その瞬間、一気に教室がざわついた。

「静かに！！ 佐久間の事は、今警察が捜してくれている。 あいつのことだ、またひょっこり戻ってくるだろう。 じゃ、朝のホームルームを終わる」

無責任な担任だな、とか、ホームルームの形式くらい護れよ、とか考えながらも俺は……「他人に無関心人間」な咲本焰は、佐久間稔里を心配していた。

担任が出て行った教室は、いまだにざわついている。

しかし、突然、ざわめきが止まった。

それは、一人の女生徒が席を立ち、歩き出したからだ。 ……心な

しか、俺の机に向かって。

その女生徒は、やはり俺の席の前で立ち止まった。

かなりガン見されてるんですけど……そんな見ないで貰いたいんですけど。

と、視線を感じつつも、目を逸らす。

しかし、目を逸らせた目の先に、竹刀の剣先を向けられた。

「咲本焰……」

その声には、深い憤りを感じた。

名指しされたとなりや、もう逃げられない。

諦めてその女生徒に向く。

……意外や意外、その女生徒に見覚えがあった。

（確か、こいつは……最後に佐久間に会った時、佐久間を連れてった友達か……）

名前は……記憶にない。

「……なんか、用か？」

努めて平坦な声を出した。

一瞬だけ、女生徒の顔が怒りに歪みかけた。

「咲本焰……貴様のせいだろう。稔里が消えたのは……！！」

その声は低く、竹刀なんか突きつけて……脅迫だろ、これ確実に。

「はぁ……んなワケ無いだろう。どこにそんな証拠があるんだ？」

ため息をつきつつ、俺はおどけてみせる。

……俺の悪い癖だ。わざと相手をイラつかせ、先に手を出させる寸法。後からやれば、正当防衛になるからな。

「貴様あつ!!」

俺の態度に我慢が越えたのか、俺は胸倉を掴まれて、無理矢理立たされた。

……痛てえよ、くそっ。

しかし、八つ当たりは止めて欲しい。

「俺は何か間違った事を言ったか？ お前はただ、仲の良かった佐久間が居なくなつて、悲しみを紛らわせようと、俺に八つ当たりしてるだけだろ。八つ当たりされてる身にもなれ、正直困るんだが……」

「クッ!!」

なんだ、本人も認めてるじゃないか。

認めているからこそ、事実を突きつけられて詰まっただろう。

「いい加減、放してくれないか？ 俺が関係してるならまだしも、関係の無い事でここまでの仕打ちは初めてだよ……」

もう癖になっているのか、今の言い方は俺が完全に悪の様だった。

胸倉から手は放してくれたが……次の瞬間、竹刀を上段の構えで俺に向かっていた。

おいおい……マジかよ……。

「くそおおおおお!!」

年頃的女子が口にしないような罵声を叫びつつ、俺を叩きつけて来た。

ばきいいいい！！

どれほどの力で叩きつけられたのか、反射的に身体を護った腕に来る痛みは思ったよりも軽かったが、小気味良い音を立てて竹刀は折れた。

単細胞だとか、幼稚だとか、相手を自分より下に見て、感情を押し殺す。……それはもう、無理だった。

先ほどから内より沸々と滾っていた感情が……爆発した。

「……ふ、ざ、けんなあああああああっっっ！！！」

力任せに机をブン殴った。

ゴシヤツ！！！！

………机の、天板が、割れた。

その光景と、事実には俺の激情はすう……と、即効で失せていった。

周りから向けられる視線に居心地の悪さに、もう間も無く一時限目が始まる教室を、足早に出て行った。

○○○

普段は誰も寄り付かない、校舎横の校庭の隅で授業をサボっていた。

「……ダメでしょ？ 授業をサボっちゃ……」

この場所に来るのは、俺の他にもう一人。
俺の従兄弟で、財閥の御曹司。

「……………」

答える気力も無い俺は、失礼とは思うが無言。

「もう……しょうがないなあ。 相談に乗って上げるから、まず起きようよ」

そして、最強の優男。 ミヤムラリュウセイ
「宮村龍青」

不服ながら、この男の人の良さの前では、全ての人間が心を許す。
そんな男だ。

……それは、俺も例外ではない。

「ああ……実は……………」

俺は龍青に、先ほどの出来事から、夢の中の出来事を、事細かに話した……。

「なるほど……」

俺の話が終わると、静かに、そして優しく相槌を打っていた龍青は俺に言った。

「夢の話は、焰があると思えば、実際にあるんじゃないかなあ……。夢の中であつたとしても、その夢の中での生活、行動、記憶は、焰に実際起こつた事であつて、焰以外の人には分からなくとも、焰から見ればそれは真実でしょ？」

他人にしてみればこの上なくどうでもいい話であっても、龍青は真面目に聞き、答えてくれる。

「まあ……。そうではあるな」

「うん、だから、夢の話はある事なんだよ、きっと。でも、ついさっきの出来事については……。僕からは何も言えないね」

こちらには意外だった。

龍青は、誰に対しても平等に接する。

てつきり、良くてどっちもどっち。悪くて、キレた俺が悪い。

と言うのだと思っていた俺は疑問を口に出した。

「なんでだ？　いくら八つ当たりされたとは言え、キレた俺が悪いだろ。何でなにも言えないんだ？」

「……いつもの焰だったら、焰が悪いって言ってたよ。でも、今回は違う。他人にあまり興味を示さない焰が、佐久間さんを心配したんでしょ？　それなのに、八つ当たりをされてキレるのは、しようがない事だと思う」

「そうか？」

それでも符に落ちない。

「しかも、相手は武器を持ち出したんでしょ？ それは反則だよ。力のある人は力の使い方を分かってなきゃ。私用で暴力を振るっちゃ、僕はその人の人格を問いたくなるよ。で？相手は……話を聞く所に寄ると、多分「源^{ミナモト}冬^{トウ}香^カ」さんだね。

「え……分かるのか？」

「ふふ……だって、竹刀持ってたんでしょ？ 焰のクラスで剣道部は彼女だけだよ」

特に興味は湧かないが、龍青は流石だ。この学校の全生徒の顔と名前が一致する男だと言われているだけはある。

「それじゃ、行こう？」

突然の提案に戸惑った。

「どこにだよ？？」

「……誤解を解くんだよ。 焰だって、後味悪いでしょ？」

またもや面倒な事を……と内心思ったが、こうなったら龍青に従うしかなくなるので、俺は割り切って、感情を押し殺して、気を引き締めて、先を歩く龍青の後を追った……。

第20話..真実、父親

「失礼しました」

用件が終わったので、職員室を出た。

時刻は既に午後5時を回っている。

とつくに授業は終わっている時間だった。

……が、机を割った謝罪をしなければならいので、面倒ながらこなしした。

待っていてくれた龍青と共に校舎を出る。

「それにしても、やっぱり彼女も責任と言うか、罪悪感があったんじゃないの?」

先ほど、俺を怒鳴りつけ、謂れの無い罪(?)を着せられ、竹刀で叩いた源冬香は、あの出来事後、即行で早退していたらしい。

「まあ、明日でも誤解を解くのは出来るから、今日は帰ろう。 ……」

…明日、休んじゃダメだよ? 焰」

「わかってるよ。 どうせ、休んでも家まで来て連れ出すんだろ?」

「人聞きが悪いなあ……。 でも、僕は焰を信じてるからねっ!」

「あいあい。 しょうがないですねえ……」

「もう……そんなテキトーな二つ返事して……。 今回の事だって焰が悪かった部分もあるんだから、ちゃんと反省しなきゃダメだよ

「？」

「……………」

俺が悪い。そう、俺が悪いんだ。

ふてくされたとか、そういうのではなく、本心で……そう思う。

冷静に考えてみれば、いつも俺はクラスメートを馬鹿にして、本心を押し隠し、感情を噛み殺し、何事も平然な顔をして過ごしていた。今回の件も例外ではない。

何故俺は、感情の箍たがが外れて、本気でキレてしまったんだろう……。短い時間でも、本当の自分を曝け出せた、あんな夢を見たからだろうか。

……或いは……。問題にされたのが、佐久間だったからだろうか……。

「ちゃんと明日、彼女の誤解を解くんだよ？」

「ああ、それは分かったから。……そういや、明日って何日だっけ？」

あんな夢を見たせいで、日にち感覚が狂っている。

「え？ ……明日は23日だよ？」

「そうか……。ん？？？」

……今、何か、何かが、引っかった。

「どうしたの？ 焰」

急に立ち止まり、考え事を始めた俺を見て、龍青は疑問に思っただろう。

しかし、明日が23日言う事は、今日は22日。

あの本を開いたのは21日……覚えている。

本を開いた時、ページの端にその日の日付が書かれていたからだ。

これだけであれば、なにもおかしくは無い。

しかし、あの世界が夢だと言うのなら、あの時そのまま翌日まで寝たのだろうと思う。……が。

毎月、奇数日の夕食当番は俺である。

今朝の俺の起こし方を見れば、俺がどんなに爆睡しようが、関係なく俺をどんな手段を使っても起こすだろう。

それに加えて、今朝起きた時の俺の格好だ。

あの時は確かに制服を着用し、気絶するように眠りに落ちたんだ。

それなのに、俺は寝巻を着て、ベッドの上で、布団をしっかりと掛けて寝ていた……。

考え出せば、次から次へと綻びが出てくる。

……何かが、おかしい。

その時、今朝家を出る時の母の言葉を思い出した。

——……夢なんかじゃ……無いのよ。

言葉は聞こえたが、その時、意味は理解できなかった。

もしや………様々な仮定を立てる事が出来たが、俺はほぼ、確信していた。

母さんは何か知っている。その上で、あの夢はこの世界と違う時間軸の場所で実際に起こった事なのだと。

「龍青、すまん。用事を思い出した。俺は先に帰る。また明日な」

「え？ あっ……うん。また明日あ！」

俺は龍青の返事を待つ前に駆け出していた。

真実を突き止めるのに、急ぐ必要は無いはずなのだが、何故か今の俺……いや、今日の俺はおかしい。

多分、またあの世界、テラに行きたいのだろう。

あんなに解放的で、神秘的で、好奇心がくすぐられる世界を体験したら、また行きたいと思わないほうがおかしい。

○○○

我が家の鍵を開けて帰宅する。

「ただいまあー！」

帰宅の挨拶だけ済ませ、急いで二階に上がり自室へ急ぐ。荷物を机の上に置き、すぐさま居間に下りる。

「おかえりなさい。今日は少し遅かったね」

エプロン姿の母親がキッチンから出てきた。

「ああ、帰り道に龍青と喋って……。……それより、母さん」

「何？」

「昨日の夕飯はどうしたの？」

「え？ ……いつも通り、焰が作ってくれて、いつも通り食べたじゃない」

何をそんな事を……。とでも言いたそうな母さんの顔に怯みそうになるが、こんな事は想定内だ。

「じゃあ、昨日のメニューはなんだっけ」

「……。え？ 昨日は……。餡かけ焼そばでしょ？」

決まった……。

「……テキトーな事言って誤魔化せると思わないでね、母さん。
……。そりゃ、昨日は餡かけ焼そばの予定ではあったけど、本当は賞味期限ギリギリの豚肉が冷蔵庫にあったから生姜焼きにしようとしてたんだよ」

「んっ……。……！！！」

言葉に詰まった時点で、もう勝ったも同然だった。

「はあ……。そろそろ感づかれると思ってたけど、意外と早かったわね。わかったわ。話すわよ……」

母さんが椅子に腰を落ち着けたので、俺もそれに倣い、椅子に座った。

「話す、といっても母さんも、ほとんどの事は知らないのよ。分かる事は、あの世界に行くための触媒があの本って事と、あの本を書いたのは火燕^{ひえん}さんって事と、行ったら最後、こういうタイミグで帰ってこれるかわからないって事よ」

火燕……海外に単身赴任している俺の実の父親。
まて、親父があの本を書いたということは……。

「じゃあ、親父もテラに行った事があるのか？」

「いえ……違うわ。焰、落ち着いて聞いてね……」

その後に聞かされた言葉は俺の想像を遙かに上回った内容だった。

「火燕さんは……テラの生まれよ……」

一瞬、その意味が分からなかった。
つまり、俺はガイアとテラの……ハーフ？

「火燕さんは、向こうで今の国王と友達でね、その国王を含めた4人で、当時の災害を止めた英雄なの」

なんなんだ……。

「本当は、この話、焰が17歳になったら話すって言う約束だったんだけどね……。焰は頭がいいし、察しがいいから、薄々聞かれるとは思ってたけど……」

「で？」

「なに？」

「その親父は、今何処にいるんだ？」

「ああ、単身赴任って言うのは本当よ？ フランスに行ってる」

「そう……なんだ。 ……母さん」

「何？ 焰」

「今日も、テラ行っている？」

「それは……あなたの意思で決めて頂戴。 でも、私達から言わせ
てもらえば、あの世界には、あなたと言う存在が、必要になって
いくことでしょう」

正直、父親が地球人でなくたってどうでもいい。

そんな事で、人を非難したり、軽蔑したりしない。

そんな事より、今俺の中にあるのは……また、あの世界に行けると
言う事への安心、それだけだった。

「その顔は……多分、行くんでしょね。 ……あなたに渡すもの
があるわ」

母さんは棚の奥から、小包を取り出し、その中身を俺に差し出した。
それは、500円玉くらいの透明な結晶だった。

その結晶の中で、小さな炎が揺らめいている。

「……これは？」

「それは神想結晶^{フリング}よ。火燕さんが、あなたへ、つて……」

物は分からないが、一応受け取っておく。

「母さんからは、これ」

いつの間に床に置いていたのだろう…？

それは、剣だった。

全体が白く、柄頭に赤い宝玉が埋め込まれている。鞘付きの細身の片手両刃剣。

「この二つを持っていきなさい。晩御飯は私が作るから。いいわよ、行ってきたさい」

「……行って来るよ。母さん」

○○○

居間を出て、二階に上る。

自分の部屋に入り、机の上に置いていた本を手取る。

母さんから渡された二つのものを手に取り……俺は、迷い無く本を開いた。

開いたページの端に「7／22」の文字が浮かび上がった。

そして、俺は気を失った……。

第21話：義国首都シンセプト

「起きろ、ホムラ」

声が聞こえた。

俺を眠りから起こそうとする声が……。

静かに目を開ける。

そこには……石造りの部屋にベッドがいくつか……。

感覚として一日前に眠りに落ちた、グラントピアの医務室だった。

（戻って来れた……）

「やっと起きたか……今日はやっとシンセプトに戻れるんだな。
昼飯もう出来てるんだからな、あんまり遅れるなよ?」

「プライン、身体は大丈夫なのか??」

下半身は、ラフな寝巻き。

上半身は裸ではあるのだが、包帯を結構巻いているため、肌が見えない。

「ああ、大丈夫だ! まあ、最後のあれを喰らってたら、流石の俺もヤバかったな」

そういえば、よく覚えていないが、一応プラインがやられる直前に止めたんだっけか……。

最後はシルファ団長が討ってくれたが……。

「まさか、お前に助けられるとはな……。その……。サンキュな、助けてくれて。……。うし、じゃ俺は行くから」

そういつてプラインは医務室から出て行った。

さてと……。俺もそろそろ準備するか。

丁度良く、腹の虫が泣いた。

○○○

ギイイイイイイイイイイイ！！！！

グラントピアの首都側入口が重い音を立てながらゆっくりと巨大な門が開く。

「ご苦労様ですっ！！　どうぞ、お通りくださいっ！！！！」

礼儀正しく、親切丁寧に案内してくれた門番はトルメリアのとは大違い。

「しかし、別に馬は要らないんだがな……」

確かに、両側を山で囲まれた広大な土地に築き上げられた王国は、目と鼻の先にある。

距離にして1キロも無いだろう。

首都までの街道は石畳で整備されていて、道幅が広い。

「んじゃ、行くかつ!!」

いち早く手綱を引き、プラインが乗る馬が駆け出した。

「あつ、待てよっ」

俺もそれに続いた。

昼飯をたらふく食べた腹には、丁度いい運動になった。
5分掛かるか掛からないかで首都シンセプトに着いた。

「お待ちしておりました、コルトス隊長、シャイン副団長」

シンセプトの正面玄関、ラトス門の形だけの門番が、プラインとルネに敬礼をした。

門をくぐった先にあった光景は……。

「うわぁ……」

大きい。とても大きい。

道幅は10mくらいあり、道の両側にある石造りの建物は、全て商店となっており、悠々としている道のはずが、買い物客でごった返し、一つ間違えれば迷子は間違いなし。

喧騒や、人ごみは嫌いなのだが、この光景は不思議と嫌味がなく、不快感が募らない所か、高揚感を感じられる。

活気のあるメインストリートは、空の蒼と相まって、この国が平和で豊かなんだと認識させられた。

ま、義国って呼ばれる位だな。

街の中心には、ここからでも充分巨大に見える城が姿を現している。

「さて、行くかつ！」

しばらく立ち止まって景色を見ていた俺の肩に手を掛け、歩き出した。

後を追ってしばらく歩きつつ、周りを見てみれば……負の表情をしているのは、見た所誰もいない。

俺は、これからこの身に降りかかる事に関して、ほぼ理解していない事を思い出し、プラインに聞いてみた。

「なあ、プライン。具体的に俺は、いつ、どこで、何を、誰と、どうしたらいいのか分からないんだが……」

「ん？ 説明してなかったっけ？ ……まず国王に謁見してから、神官の所に行ってホムラの特性を占ってもらったりする」

「……で？」

「全てはヴェルヒム様が決める事だ。俺は何も言えないし、どうなるか分からない」

「だよねえ……。 実際、今回はヴェルヒム様の密命だったし」

まさか……親父は国王達と友人関係であったとは聞いたが、息子が来るとか言っていないだろうな……。

……………。

あれからどれくらい歩いただろう。

同じような景色のはずなのに、さっきからずっと見飽きない町並み。平和一色に見えていたが、やはり犯罪と言うのはどこでもあるらし

く……。

「ひったくりっ!! その赤い服の男、ひったくりよっ!! 捕まえてっ!!!!!!!!!!」

突如前方から聞こえた悲鳴に反応したプラインは既に駆け出していた。

「待てこらああああああ!!!!」

威圧的な声と共にプラインは犯人を追っていった。その犯人が視界の隅に映った。

「っ!!! ホムラあ、そっち行った。逃がすなよっ!!!」

俺名指しかいっ!!

というツツコミは心の中で済ませ、俺も犯人目掛けて駆け出す。……つか、アホか。ひったくりをするのに目立つ色の服なんて着てるから、相手の方が速いが見失う事は無い。

しかし、相手も馬鹿ではない。ずっと大通りを逃げるわけ無く、小路に入ろうとしていた。

(くそっ、このままなら見失っちゃう。……しかたない)

腰のフックに掛けてある剣を、鞘ごと手に持ってから……。

「追風陣ッ!!」

空中に駆け上がるように地面を蹴ると心地よい浮遊感を感じつつ、走り幅跳びのような体勢で、瞬間的に犯人のほぼ真上に移動して…

「ああ、そうだな。結構慣れてきたかもしれない。追風陣だつて、すぐ出来るようになったし……プラインの特訓のおかげだな」

「まあ、そうだな!! ……さっきの犯人も警備隊に引き渡したから俺らも行くか」

異様に胸を反らし、自分の功績を、自分だけで称えていた……。

その頃、シンセプト城内、物見台の上で地位の割には質素な服装を身に纏った男が、双眼鏡を持ち、城下の様子を窺っていた。

「なるほど……しっかりと面影がある。一目で分かるな」

そんな事を呟いてから、いそいそと物見台から下りた。

義国王ヴェルヒムは、自分の友人の息子を歓迎する準備に急ぐのであった……。

第22話：近衛隊長と剣（前書き）

作者急病のため入院していきまして、更新が遅れた事をお詫び申し上げます。
すみませんでした。

第22話：近衛隊長と剣

こういう街でも、いや、こういう街だからこそなのか……？

「おう、兄ちゃん！　こいつを持ってってくれっ！」

ここら辺は食材商店街なのか、八百屋を経営しているらしいオッチャンからトマトを貰った。

……正直、困るんだが。

「あ、あんたね、さっきのヒーローは……これ持ってってよ！」

今度はオバチャンにキュウリを貰ってしまった。

それからしばらくの間、店頭で呼び止められる度に食材を貰い、両手では溢れる量だったので、プラインとルネに持ってもらった。

……このように、歩けば噂され、答えれば何か貰い……心の中で温かい何かが広がるのを感じた。

紙袋を貰い、持ちやすくはなったが……これから入城するんだよね……？

そんな心配をした俺だが、見た感じでは城までまだまだ掛かりそうだ。

「さっき無駄に走って腹減ったな。　別に入城の時間決められてないし、ここで食っちゃおうぜ」

情けない表情を見せながらのプラインの提案は可決された。

他の飲食店ならいくらでもあるにも関わらず、迷わず一軒の店に向かった。

なんでも二人の行きつけの店らしい。

店内は喫茶店の様な雰囲気、こざっぱりしている。
入り口の扉に取り付けてあった鈴の音がなんとも心地よい。
店の前にあった立って掛け看板に寄れば、昼時には軽いランチを出しているらしい。

店主と見受けられる人物は、中年太りの柔和な顔が特徴的な男性で、他の客と談笑していたが、俺たちの入店に気付きこちらに来た。

「おお、プラインじゃないか、ルネも！ 久しぶりだな」

「マスターも、久しぶり」

表情を明るくさせたマスターは、予想の通りに聞いてくる。

「そいつは？」

初対面の人間に「そいつ」はないだろう、と思いつつも自己紹介。

「俺はホムラ、サキモトホムラって言います。はじめまして」

「おうおう、はじめまして。俺はマスターって呼ばれてる」

軽く挨拶を交わし、プラインが適当に注文する。

とりあえず窓際の4人がけ席に腰を落ち着かせる。

店内を見回すと、客の入りはいいようだ。

ざっと数えて10人くらいが、せわしなく食事している。

（ん……？）

カウンター席に座り、俺たちに背を向けた格好でなにかを食べてい

る一人の女に視線を留めた。

茶がかった金髪で肩甲骨辺りまでのセミロング、背筋がよくピツとした姿勢、身体には印象的な鮮やかな緋色の軽鎧を着用し、腰にはこの世界では珍しい太刀を帯刀している。

歳は……多分同じくらいか？

どこかで見覚えが……軽い不愉快な感覚だけが掠める。

その後ろ姿を眺めつつ、記憶を辿る。

その行為に夢中だったためか、呆けていた。

「ん？ どしたホムラ。 さっきから、あの女に気でもあるのか？」

意外とめざといプラインであった。

「んああ、いや。 見覚えがあったな……と思って。 いや、他人の空似だ」

視線を窓の外に向ける。

そこには、変わらずに活気がある街並みがあった……。

しばらくして、俺たち3人の前に料理が運ばれてきた。

「なんだ、これ……」

俺は思わず漏らしてしまった。

見た目がとても酷いと言う訳ではない。

においが強烈で鼻に付き、食えないと言う訳でもない。
では、なにか。

「さすがにビックリしただろう。 「ムーンナイト」特製ランチ・

超大盛りだ!」

そう、豪快すぎる。

皿が大きすぎる、丼だろ、これ。

ちなみに、ムーンナイトとは「moon knight」と書き、この店の名前だ。

「いただきますっ!!」

「頂きます!」

「いつ、頂き……ます?」

プラインは即行で食べ始める。……よほど腹が減っていたんだろう。

ルネは礼節を忘れていないが、特に物怖じせずに食べ始める。：

：おいおい、全部入るのか?

俺はといえば……完全にこの料理に圧倒され、食べる前からご馳走さまな気分。

三者三様の反応にガハガハ笑いながら厨房に戻っていくマスター。

とりあえず、20秒ほど出遅れて食べてみる。

スプーンで一口すくってみる。

全体像でみれば、富士山に一步だけ踏み入れるといっても過言でもないほどの、控えめな一口。

パクリ。

うまい。

感想終わり。

「え、嘘?!」

「ん、ぼっぱ（ん、どった）？」

「ライ汚い！ で、どうしたのホムラ？」

「いや、嘘のように美味しいからさ。 内心、とても驚愕だよ」

美味しい上に、もう一口もう一口と、後を引く。

そうなって食べて行く内に、いつの間にか満腹であり完食しているのだろう。

それから俺は無心で食べ続けた。

.....。

はい、完食。 ご馳走様でした。

「ふはは、最初は物怖じしてたくせにしっかり完食してらあ」

会計の時にガハガハ大笑いしているマスター。
言われたままでは癪なので返してみる。

「払う分、しっかり食べませんとね、勿体無いですよ。 まあ、そういうのなしで美味しかったですよ」

その反撃に少しだけ怯みはしたが、

「ガハハハハ！！ 気に入った。 上手い反撃だ。 また来いよ、ホムラ」

流石に、この手の事には慣れているんだろう。 軽い調子で受け流

された。

そんな声に見送られながら、ムーンナイトを出た。

一応確認したが、当然、気になった女性剣士？は既に店を出ていた。

「さて、腹も落ち着いたことですし、ちゃっちゃと行きますか」

今度こそ城に行く事になった。

……野菜がたくさん入った紙袋を残して。

○○○

やっとの事で城門に到着。

ムーンナイトからここまでは、特に呼び止められることも無く、無事に来られた。

先ほどのひったくり事件から時間も結構経った事で、噂が止んでくれた様だ。

やはり、俺に日なたは眩しすぎる。

今はプラインが城門番に掛け合っている。

シンセプト城の城門は普段から解放されていて、緊急時でなければ閉まる事はまず無いらしいのだが……。

「これは密命だったから、ちゃんと手続きしないといけないんだ」
……との事。

「準備整ったから入ろうぜ」

プラインが戻ってきた。その時に気付いた。

「あ、街のみんなに貰った野菜、ムーンナイトに忘れた。俺取って来るっ!!」

「ん？　　そういえばそうだな。　　ああ、行って来い！」

プライン達を待たせるのは悪いと思い、猛ダッシュ。

チリリ〜ン……程よい余韻を残す鈴の音を聞きながら……。

「マスター！　　はあはあはあ、俺たちが座ってた席に、はあはあ、紙袋、はあはあ、ありませんでした？」

「うお?!　　おお、ホムラか。　　そういや、さっき客から忘れ物受け取ったが……これか？」

その手にはまさしく、そのものがあった。

「はあ〜良かったあ……はあはあはあ……」

「それにしても、お前どこから走ってきた？」

「はあはあ、じよ、城門からですよ、はあはあはあ」

「どんだけだ!!　　お前やるなあ」

マスターに褒められた(?)。

改めて考えてみればとんでもない距離だな……。

ムーンナイトから城門まで歩いて30分掛かるか掛からないか……約2kmを全力ダッシュ。

なるほど、だからこんなに体が軋むのか。

「では……また」

目的は果たしたので、本日2回目のムーンナイトを後にした。

すぐにでも戻りたいが、いささか無理があるので、休まるまで歩く。それでも、出来る限りの早歩きをする。

気付けばシャツの中は汗だくだ。

今更だが……何故制服で来たんだろう。

制服内の保温性と保湿性がとても発揮している……。

デコに張り付く髪の毛が鬱陶しい。

イライラを吹っ切るためか、いつの間にか歩きとは思えない速さで進んでいた。

……そして学んだ事。『イライラは、総じて注意力を散漫させる』

ドカツ!!

はっとした時には既に遅く、右から来た人物にぶつかって横転させてしまった。

「うおっと……すいません、よく見えなくて」

慌ててその人が立つのを手伝おうとするが、手で制された。

「いや、こちらもすまない。少々考え事をしていて……っ!!!」

あらま。

よく見れば、さっきムーンナイトで気になった女剣士じゃないですか。

んで、ご対面。

気になった理由が判明しましたよ……。

こいつ、「源 冬香」に瓜二つじゃねえかよ。

俺は表情に出ないように、心の中でだけ怪訝な顔をした。

だが、相手の反応はおかしい。

俺の顔を見た瞬間、その表情は歪んで……あの、ちょっと、怖いんですけど??

「貴様……よくも、よくもノコノコと……」

え？ 何？

なんか俺知られてるのか？

というか、声色変わりすぎだろ！

だって、この人とあったこと無いんですが……。

あっちじゃ、ちよいとしたイサカイを起こしたが……こっちじゃ関係ないだろ。

スチャリ……。

滑る様な金属音。

おいおいおい！！

こんな所でそんな太刀を抜刀するなよ！！！！

周りには野次馬。

おい、静観してないで止めろ！！

「覚悟……」

静かに、そして冷たい声で呟く。

え、マジ？

太刀を頭上に振り上げてジリジリと迫ってくる。

い、いや、上段の構えされても困るんだが……。

というか、上段の構えは超攻撃的な構え、て事は……本気？！

……野菜がたっぷり入った紙袋を片手に死ぬとか、冗談きついですよ？

「でええええいつ！！」

「うわあっ！」

カイイイイン……

最期にまぬけな声を発し、咲本焰はこの世から消えた……。

いえいえ、死んでませんよ？？

ザワザワザワザワ……

野次馬どものざわめきで我に返った。

「うっそお……」

実は今の、俺の声です。

それもそのはず、俺の手に剣があった。

母さんから貰った、あの剣が……。

「何事だあ!!」

なんともその場の雰囲気にとぐわなない拍子抜けな声が戦慄をブチ壊した。

俺は、いまだに俺に力が乗せられた太刀を、剣で受け止めつつ、そちらを見た。

野次馬の輪の中から登場したのは街の警備兵さん。

「なっ、近衛隊長、何をなさっているんですかっ?!」

「ちっ!」

警備兵が近衛隊長と呼ばれた女剣士は、バツが悪そうな顔をし、慌てて太刀を鞘に戻し、どこかへ行ってしまった。

俺のチラ見情報では、おそらく城だろう。

「大丈夫でしたか、ホムラ殿!!」

「ああ、はい。て、何で俺の名前?」

「プライン隊長に言われて、戻ってくるのが遅いので、自分が搜索に遣われました!」

「そうなんですか、すみません。すぐ戻るんで」

「はいっ! では、お気をつけて!」

離れる警備兵。

散開する野次馬。

やっと解放された俺は、二人が待つ城門へ急いだ。

第23話..全ては明日。

「おまたせ」

あの後は何も無く、無事に帰還。

しかし、あの女剣士も城に多分行ったのだろう。
結構気が重い。

「おつかれ、聞いたよ、死に掛けたって？」

情報が早いな……。

「ああ、一瞬でも武器出しが遅かったら縦に真つ二つだったよ」

「おお！ てことは武器出しもマスターか、良かった」

歩きつつ談笑。

時が経過するのが早いのか、はたまた、歩くのが速いのか、俺の知る所ではないが。

え、マジ？

もうこの扉の向こうが玉座？

……いいですよ、腹くくりました。

「では、お入りください」

侍女さんに言われて、プライン、ルネ、俺の順で入る。

「失礼しまーす」

「失礼します」

プライン、ルネ両名共に無事。
では、俺。

「失礼しま……あ……」

その姿を確認してしまった。
どの姿？

さっき、俺を殺しかけた女剣士の姿ですよ。

「っ……死」

今、死ってった、あいつ死っていった。

そして、太刀抜いてる、玉座の真横で抜いてる！！

「ねええええええええええ！！！！」

はい、繋げて「死ね」ですね。 わかりました。
て、死ぬのヤだよ？！！

にしても速いよ。

あそこからここまで数十メートルあるだろ。
既に十メートル切ってるだろ。

「はっ！！」

カイイイイイン！！

剣と剣がぶつかり合う音が響く。

ちなみに俺の剣は母さんから貰った剣。

シュンッ！！

すぐさま女剣士がバク宙で後退。

よく見たら女戦士の背中に羽がある。

人間族じゃないのか？

そんな疑問を打ち消すかの様に、声が発せられる。

「ジンブウシヨウハ塵風昇破ッ！！！！」

太刀を下から切り上げた。

俺には届くはずの無い斬撃は……風に乗って俺に運ばれた。

嘘だろ？　こんなかわすのはもちろんの事、受け止めるとか不可能だろ。

風そのものが刃と化しているコレが着実に迫る。

死ぬかもしれないが、抵抗しないというのも癪なので、抵抗してみた。

……我ながらアホです。

何故アホだって？

「追風陣ッ！！」

あの風に突っ込むからですよ。

ヒュンヒュンヒュンッ！！

何発か頬や腕などを掠ったが、構いやしない。
そのまま女剣士へとつつこむ。

「くっ!!」

女剣士は上へ飛んでよける。
飛べるのは卑怯だぞ!!

俺も負けじと、それまでにの勢いを殺さずに上へ跳んだ。
そしたら、意外な高さへ跳べた。

何かが推進力として働いたんだろう。

上昇気流なんて、建物内に吹かないだろうし……。

その時、微かな熱を感じた。

そんな事は別にどうでもよく、今は女剣士しか視界にない。

「飛刃ッ!」

上へ、俺の上空に飛んでいる女剣士へと、想像があやふやな飛刃を放つ。

出るかどうかも定かではなかった飛刃は、結果から言えば出てくれた。

しかし、その姿を変えて。

ボウッ!!

メラメラと発火していた。

俺は、そんなモノを想像なんてしていない。

「うわああっ!!」

既に刃ではなく、火そのものをモロに喰らった女剣士は気が散ったのか、俺の真上から落下してきた。

……え???

「うわっと!!」

ギリギリの所で女剣士を受け止めた。
受け止めたって言うか……お姫様抱っこ??

「つく!!」

「うおっ!!」

俺の腕から、体操の空中技のように超アクロバティックに逃げて、着地。

俺は、これ以上はやる必要ないと判断し、剣をしまう。丁度、腰に鞘も出現してたしな。

しかも、今思い出したが、ここって玉座の間じゃないですか!!

ザワザワザワザワ……

今更になってざわめき始めた者たちがいる。

大方、貴族の辺りだろう。

「静まれえっ!!!!」

その喧騒に一喝。

うるさかった貴族達は黙った。

「トウカ、これはどういうことだ?」

俺の前にいる女剣士は、どうやら「トウカ」というらしい。

「……………」

当の近衛隊長はだんまりだ。

「どういう事だと聞いているっ!! どういうつもりだ、大切な客人に対して、粗相なんてものじゃない、お前は客人に刃を向けたのだぞ、殺そうとしたのだろ? それがどういうことか分かっているのかっ!!!!!!!!!!」

広い玉座の間に、国王の大声量は反響する。

近衛隊長は苦渋の表情をしている。

国王が次の言葉を言おうと大きく息を吸い込んだ。
次の瞬間。

「お、お言葉ですがっ!!」

国王の声に負けず劣らずな声量で対抗したのは、玉座の横に居た、白いフード付きマント着た少女だった。

「……なっ!!」

俺はその少女の顔を見て、絶句した。

「佐久間……稔里……?」

その少女が一瞬、こちらに微笑みかけた気がした。

「ヴェルヒム様、この件、私に免じてトウカを許してあげては貰えないでしょうか?」

「いや、しかし、ホムラ殿に申し訳が……」

「ホムラ殿は私の友人です。　ですので、許してくれるでしょう。ね、焰くん？」

話を急に振るな、とツツコミつつ、俺のことを焰と呼んだ事によって、あの少女が紛れも無く「佐久間　稔里」だということが証明された。

「……許すも何も、俺には恨まれた理由が分からない。　訳をきちり聞かせてもらって、きちんと理解できれば、俺を二度も俺を殺そうとしたのは許す」

「ヴェルヒム様、ホムラ殿もこう言ってますし、ね？」

国王ヴェルヒムは釈然としない顔をしていたが、渋々と言った感じで引き下がった。

「んー、これから謁見の儀をするのもアレだ。　本日は解散!!」

国王の一言で貴族たちは散開した。

「はじめまして、ホムラ殿。　私はシンセプトの国王「ヴェルヒム」です。　先ほどは部下が粗相をして……申し訳ありませんでした」

……国王に頭を下げられる俺って何よ？

「い、いえいえ。　こちらこそはじめまして、私はサキモトホムラです」

「チェンクからの長旅で疲れたでしょう、プラインとルネもお疲れ

様でした。 諸々の事は明日に回して、今日はゆっくり休んでください」

「あ、ありがとうございます」

ヴェルヒム様は諸々と言ったが、実質全てだと思う。

その全ての疑問を明日に回すというのは、俺にとって中々拷問に近いものがあるが、そこを堪え明日を首を長くして待たなければいけないらしい。

しばらくして侍女さんに連れられ、俺に割りあたった部屋に入った……。

第24話：創造魔法と救世主と折れた剣

休養と言われても、する事が無い。

『寝る』

そう、寝ればいいのだろうが、あいにくまだ眠くない。
理由としては、腕時計を見れば短針が5に到達していないからだ。
基本的に昼寝はしない俺である。

部屋の中はさっぱりしていて娯楽なんて在るはずが無い。
外開きの窓を眺めると、屋外は気持ちよく晴れている。 いわゆる
快晴って奴だ。

平和そうに小鳥がチュンチュン鳴いてやがる。

まあ、時にはゆったりと寝る事も大事か……。

その後、俺は夕飯の時間までぐっすり眠ったのであった。

夕飯を済ませた後、佐久間が部屋に来て、俺の想像魔法を調べてくれた。

結果、俺のは「創造魔法」というらしい。

読み方が一緒なので、紛らわしいが、凄く使えるのは間違いないだろう。

しかし、俺は魔法に関してドシロウトなので、今後の活躍に期待、
ってところだな。

たっぷり寝たのにも関わらず、その日の夜は不思議と寝つきがよかつ

た。



次の日、俺は玉座の間に案内された。

「わざわざ呼び出してすいません、ホムラ殿」

申し訳なさそうに謝罪してくる。

「いえ、別に構いません。それより、一国の王が簡単に人前で頭を下げるのはどうかと思います」

周りには貴族達がいるのだ。

貴族といえば、なにかと良いイメージは無い。

「それは、私の性格なので…。ご指摘感謝します。……それで本題に入りたいのですが？」

俺は手で「どうぞ」のジェスチャー。

「近年、大気に満ちるイマジンに数々の異変が起きています。主

にあるのは動植物の魔物化があります」

あのデスグリズリーとかか……。

「あまり表立ってはいないのですが、現実として、川が幾つか枯渇しています。それだけに止まらず、全てはイマジンが不安定なのが原因なのですが、他にも様々の問題現象が発生しています」

そんなことまであるのか……。

「さて、咲本殿。ここからが本題ですが……あなたに救世主として、これらの問題を解決して頂きたいのです」

「無理です。」

……思わず即答してしまっていた。

周りの貴族やら達も動揺しているのか、ざわつきはじめる。

「ホムラ殿に解決してもらう理由はちゃんとあります」

……なんだ？

「蛮国ストラトスにあるライジュ島と言う孤島に、『悪霊の傷跡』と呼ばれる戦場跡があります。そこにある世界樹の根元にイマジンをコントロール出来る神殿があるのですが、そこには救世主の血を引く者しか入れないのですよ」

……は？

「救世主の血を引く者。それはつまり、『創造魔法』を引き継ぐ

ホムラ殿のことです」

……はい？

「ですから、きっとヒエンからホムラ殿に救世主が引き継がれたのは必然的だったのでしょうね」

……何故、親父が出てくる？

「ホムラ殿、あなたの返答を聞きたい」

「……俺、は……」

俺は……、俺は……。

ドウウウウウウウン！！！！

俺が思考していた時、地を揺らす轟音が玉座の間に響き渡った。

「何事だ！！」

「報告しますっ！！」

騎士団員の一人が慌てて駆けて来た。

「宝物庫に貯蔵してあったエディン・プレートに、白光の重鎧
集想の紋章何者かによって
ギヤド・シールが取り付けられ、鎧が動き出しました！！」

鎧が、独りでに動く？

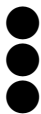
「なんだと?! 騎士団は何をしている」

「一応、被害を最小限に食い止めようとして、包囲していますが、
鎧がラジエート・ソードとエント・ラスーアを所持し、苦戦して
いますっ!!」

鎧が動いて、なおかつ、剣と盾を持って人間と戦ってる？

「近衛兵4名とホムラ殿、それとプライン、ルネ、付いて来てくれ
!!」

「案内しますっ!!」



ヴェルヒムに連れられ、5分ほど。

到着までに、軽く10回は轟音が鳴り響いていた。

宝物庫らしき場所へと続く扉から黒煙がもくもくと立ち込めている。

そこには……重鎧が、剣と盾を持つ物があり、騎士団と戦っている。
それは、さぞ生きているかのように、なめらかで無駄の無い動きで、
騎士団の包囲から抜け出そうとしていた。

しかし、冷静に見てみると、先ほどから剣を一切使っていない。
ただただ盾を使い、騎士団員をふっ飛ばしているだけである。

その鎧の左胸の場所に例のシールがあった。

そんな格好の的となる場所にあるにも拘らず、騎士団が苦戦しているのには、理由があった。

鎧が持つ盾の大きさだ。

一般的なバックラーと呼ばれる盾は小型で、防護や攻撃補助に用いられるが……。

鎧が持つ盾は古代ローマで使われたスクトゥムと呼ばれる長方形の大型盾を使用していた。

本来、盾は小型なものほど、盾で殴るなどの攻撃補助に適し、大型のものほど攻撃の時には使えない。

だが、鎧はあろうことか、その大型盾を片手で持ちあげ、ハンマーの如く振り回し、騎士団を圧倒している。

だが、さすがに大型のものだけあって、遠心力などその他諸々の物理的、力学的エネルギーの作用によって、一撃一撃の間は隙が大きい。

攻撃と攻撃の間隙に一気に間合いを詰め、手早くシールを破壊しなければ……。

………何故だろうな？

聞いてみたところ、一気に間合いを詰められる手段があるのは俺の追風陣だけらしい…。

けど、やらなきゃいけないからな。

とりあえず、剣は出しておく。

よく見て…

一振り…3人くらい吹っ飛んだ。

二振り…7人くらい吹っ飛んだ。

三振り…空振り、今だっ…！！

「追風陣…！！」

突きの構えで突撃。

目標は一点、左胸にあるもの。

完璧だった。

……はずだった。

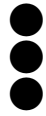
結果だけいえば、シールの破壊は成功。

鎧もただの鎧となり、宝物庫に逆戻り。

しかし、俺が使用した剣が折れたのである。

空振りで隙が出来、特攻をかけたのだが、鎧の尋常ではありえないスピードの反応によって、シールを破壊する直前に、剣の横っ腹に一撃入れられたのであった。

それは、母親から預かったものだった。



あのあと、ヴェルヒムから「救世主の話は考えておいて下さい」と言われ、特に片付け作業はせずに部屋に戻ってきた。

ベッドに腰掛け、そのまま崩れ落ちる。
上半身だけ寝転がっている状態だ。

どれほどの時間、放心していたか思い出せないが、突如現れた気配に意識が戻った。

この感覚には覚えがある。

確かにそこにいる筈なのだが、その姿を見れないという状況。

——どうも、お久しぶりですね。

そして、会話は始まった。

「あんたは、何者なんだ……？」

前々から燻っていた疑問を投げかけた。

——……………。

沈黙…仕方ないので、本題に入る。

「まあ、いいか。ところで、今度は何のようだ」

——ええ、実はですね救世主としてのあなたにです。

こいつが何を知っているように、もう驚きはしない。

「まだなると決めたわけじゃない」

——父親の背中を追いたくないのですか？

「別に、親父が絡んでるから迷っているわけじゃない」

――では何故？

「……この世界には、本当に救世主が必要なのか？」

――と、言いますと？

「というより、普通に救世主という役職が存在しているのはおかしくないか？ この世界はそれほど色々な危機に直面しているのか？」

――…あなたは何を見てもものを言っているのですか？

いきなり、声の雰囲気が変わった。

――あなたはこの世界に来て一週間たらず。全然理解していない。

他世界との均衡がメチャクチャで、しかもあなたが誕生したため対極の存在も生れ落ちましたし：

苦笑とも嘲笑とも取れる笑いを挟みながら言ってきた。

――今言った事にも気づかないなんて、今回の救世主は性能が悪いですね

一瞬イラッと来たが、何の話なのか分からないため、口を噤む（つぐ）。

他世界との均衡？

俺の対極の存在？

——ともあれ、最終的な決断の時は、明日ですからね。

「どういう意味だ？」

——それは、自分で体験してください。命を捨てるか拾うか、全
てはあなた次第ですよ。

「……?!」

気づいた時には、気配は散っていた……。

決断は明日……

全ては俺次第……

その日の寝付きは、まさしく最悪だった。

第24話：創造魔法と救世主と折れた剣（後書き）

作者の事情により、小説を書いている暇がありませんでした。

読者の皆様、大変申し訳ございませんでした。

それと、劇中の固有名詞、フリガナが読みづらいですね。
こちらに記載しておきますので、参考にしてください。

○エディン・プレート

《白光の重鎧》

（びゃっこうのじゅうがい）

※「じゅうよろい」でも可。

○ギアド・シール

《集想の紋章》

（しゅうそうのもんしょう）

○ラジエート・ソード

《瞬霆剣》

（しゅんていけん）

○エント・ラスーア

《巨人の剛壁》

（きよじんのこうへき）

第25話..悪魔族

まさしく最悪な寝起き。

瞼が重く、頭がすっきりしない。

おまけに全体的になんとなくだるい。

「はぁ……」

俺は、なんなのだろう。

好奇心に任せ本を開き、この世界に来て。

不可解な能力を持ち、死ぬような体験もして。

拳句の果てには救世主様だ？

そもそも救世主なんてのは、本当に救世して、後から付けられる名前だろう。

しかも、俺は強くない。

もしかすると、目的地に着く前にお陀仏な可能性の方が確率が高いだろう。

俺に救世主なんて仕事は荷が重過ぎる。

俺の答えは、ほぼ9割決まっていた。

女性給仕さんが朝食を持ってきてくれたので、それをはむはむと食べる。

朝食を食べ終わった後、部屋に來客があった。

「少々よろしいですか、ホムラ殿」

部屋に來たのは……ヴェルヒム様だった。

ヴェルヒム様を部屋に通し、椅子を持ってきて、ヴェルヒム様に座

るように促す。

俺もベッドに腰掛ける。

「今回の、救世主の事についてなんですが……」

唐突にヴェルヒム様が話を切り出した。

「んと…その前に、これをあなたに渡しておきます」

ヴェルヒム様が俺に渡してきたのは一振りの剣。

この剣、見覚えが……？

「これは昨日の騒動の時に、あの鎧が持っていた剣です。名を『瞬霆剣ラジエート』といいます」

俺はその剣を受け取ると、チラッとだけ見てベッドに置いた。

「それでは、本題に戻りますが……今回の事で、私の予想では、あなたは断ると踏んでいます、どうですか？」

いきなりの凶星に、俺はたじろいだ。

「無理も無いですよね。……しかし、義国王として、やってもらわなければいけません」

少しだけ、視線に威圧が混じる。

「命令すれば良いじゃないですか。俺はあなたに大きな借りがある。騎士団員、しかも団長、隊長クラスの人を二人もつけ護衛してくれましたし、王城で穀潰し同然の俺を養ってくれている。命

令されれば俺はひとたまりもありませんよ」

少し意地悪に、しかもっともな事を提案してみる。

「いえ、そんな事は出来ません。これは下手するとあなたの命が掛かりますから、あなたの意思で頷いて頂かないと…」

(チツ、面倒だな……)

「ですから私は、あなたが頷いてもらえるように、精一杯の説得をするだけです」

不敵な微笑を見せてくるヴェルヒム。

「……それで、説得のネタはどんなものなんですか？」

それ相応の理由を望むのだが…。

俺が即決できそうなネタが……。

「ええ、『^{デーモン}悪魔族』に関する事ですよ」

俺は疑問符を浮かべるしかなかった。

「やはり、プラインから聞いてないのですね…」

そういえばプラインに種族の事を説明してもらった時、悪魔族なんて全く出てこなかったな…

「簡単に言えば、生まれつき魔力が高く、肌は色黒な種族です。あと、比較的頭も良いですね」

想像で悪魔を思い浮かべるが、全部怪物になった。
まあ、そんな話はさておき。

「んで、その悪魔族が、何なんですか？」

悪魔族はどんなものかではなく、それがどうしたのかが問題だからな。

「この世界の各種族の勢力を見ると、王国があるにも関わらず、最下位は悪魔族です」

どうということだ…？

「結論を先に言いますと、この世界で悪魔族は…差別されているのです」

差別という言葉に少し反応してしまった。

「ある事件がきっかけで、ね。それは後で話しますが、その悪魔族差別は例外なく、この国でもあります」

正直、驚いた。

あんな活気があって、皆が幸せそうな顔をしているこの国でそんな事があるなんて。

「私がそれに拍車をかけたところがあるのです…」

ヴェルヒム話を要約すると、次のような物だった。
まだヴェルヒムが国王になる前から、この差別はあった。

そして、その頃からずっとヴェルヒムは疑問を抱いていた。

月日は経ち、国王となったヴェルヒムは、革命を起こそうと思った。

…しかし、現実には冷たかった。

国民からの反発、貴族達からの武力介入。

仕方なく、革命は失敗に終わった。

「私は国民の期待通りの事しか、してきませんでした…いえ、出来ませんでした」

ヴェルヒムの言いたい事はなんとなく分かる。

「載舟覆舟さいしゅうふくしゅう」という四字熟語がある。

君主を舟、人民を水に例えたものだ。

君主は、人民によって支えられ、また人民によって滅ぼされる事を意味する。

言葉自体の意味としては、水は舟を浮かべるが、同時に転覆させるものでもあるということ。

「それでこの国は幸せを送れたか私にはわからないが、少なくともこの国の平穏のために犠牲になった者達も多数居るのです」

その犠牲者が、悪魔族ということか…。

「客観的に言えば、私はあなたを利用する事に変わりない」

なるほど、自分が果たせなかった夢を子どもに託す親、のようなものか。

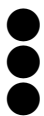
「ヒエンから聞いています。貴方は不正や理不尽、ズルな事が大嫌いだそうですね」

そういえば、昔ほどでは無いが、嫌いではある。
嘘ではないので、とりあえず頷いておく。

「一人の人間のヴェルヒムとしてあなたにお願いです。 やつても
られないでしょうか？」

俺は数秒の思案の後、了解した。
心の内では、最初から快諾しても良かった。
が、この話を聞いてよかった。

「ありがとうございます。 詳しくは、そうですね…広場に行きま
しょう」



広場に着くまでに、大まかな話を聞いた。
この世界の黒歴史のトップクラスの出来事。

「悪魔戦争」の事を。

当時の悪魔族長キルディアラは特別な神想結晶フリンクを開発していた。
神想結晶なる物は元々存在していた。
微量なイマジンを含有している鉱石の事を指して神想結晶と呼んで
いた。

だが、彼は認めなかった。

本当に微量しかイマジンを含まず、特に何の利用価値も無い石ころに「神想」などと呼んではいけないと思った。

だから、「母なる神想結晶^{マザープリング}」といわれるものを彼は作ろうとした。大量のイマジンエネルギーを濃縮、凝縮して、一つの結晶に封じ込める。

理屈は単純だった。だが、単純ゆえ難易度が高かった。

問題は、どうすれば濃縮、凝縮するほどの「大量のイマジン」を手に入れるか、であった。

彼は長く考えた後、一つの結論にたどり着いた。

「そうだ、他人から取れば早いじゃないか」

人間には元から体内にイマジンを持っている。

エセプリングとは比べ物にならないほどのイマジンを……。

しかし、体内のイマジンがなくなると、人は死ぬ。

彼は元々、研究に没頭すると、周りが見えない、と言うタイプだったが……。

その発想は、彼を人道から外すには大きすぎる選択だった。

彼は配下の悪魔族、それに盟友の妖精族、獣族を「歴史に名を残せる」と扇動した。

今までの歴史で、名を上げていたのは、神族と天使族、人間族に龍族だけであった。

なので、虐げられていた妖精族と獣族をその気にさせるのは簡単であった。

程なくして、キルディアラの計画通り、悪魔、妖精、獣による連合軍が完成した。

そして、当時の神、天使、人間の連合国、「聖王国セインツヴァリアル」に攻め込んだのである。

突如の出来事であったため、聖王国国王「V・セインツ7世」は対応に遅れ、各重要拠点を次々に制圧された。

残るは本城のみとなり、万事休すで降伏しようと国王が進言しようとした時、奇跡が起きた。

両軍がせめぎ合いを続けていた戦いの最前線に、一筋の流星が飛来したのだ。

それは、異世界からの訪問を意味していた。

そして、その流星に乗ってやってきたのは、十数年前に行方不明になったヒエンであった。

ヒエンは、フェニックスと化して、戦場を離脱し、直接キルディアラの居る移動型研究所に殴りこんだ。

そして、キルディアラは、マザーリングを見事完成させた瞬間、ヒエンによって殺された。

一件落着と思いきや、マザーリングが暴走し、主と方向性を見失った力は極限まで伸び、ついには周囲直径十数キロメートルを巻き込む大爆発が発生した。

人はそれを「神を^{ツァルセーバー}超えし現象と呼んだ。

その後、悪魔族はこの戦争の首謀族といわれ、この世界で迫害、差別、追放、挙句の果てには拷問、処刑の対象となっている。

そして、話の最後にヴェルヒムは確かにこう言った。

「これから行く広場で、悪魔族の処刑が行われます」

第26話：救世主宣言

「見えますか、あれが」

ヴェルヒム様は前方の広場を指差した。

処刑台のようなものが見えた……。

広場に着いた時にはもう人が集まっていた。

例の処刑台とやらは、まるで見世物のように置かれている。

そして、処刑台の上には人が縄で首を吊られそうになっている。

「あなたが動けば、あの娘は助かりますが、しかし……」

よく見ると、吊るされようとしているのは、色黒で、長い銀髪の少女だった。

……なるほど、特徴的な悪魔族だな。

「どうするのですか、ホムラ殿……」

衝動のままに行動すれば、また「声」の言った通りになる。

それに、あの子を助ければ必然的に俺は救世主となるんだろう。

見殺しにすれば、救世主にならなくとも済む。

しかしこの時、俺は初めて「考えと逆の行動」をした……。

後談だが、ヴェルヒムの卑怯者……！と言ってやりたかった。

「追風陣ツツ……！」

処刑台まで跳び、腰の剣を抜き放ち縄を切る。
それまで支えていた縄が切れ、少女が落ちる。

それを、俺が受け止め、抱きとめる。

「うへっ……げほっ、ごほっ……!!」

解放された少女が、激しく咳き込んだ。

「誰だてめえは!!」

「そんな悪魔は殺しちまえー!!!!」

俺が処刑を止めた事で、外野が「殺せコール」をしている。

俺はそのコールを聞き、異様な雰囲気吐き気を催した。

この広場に居る民たちのほぼ全員が集まり、一人の少女を殺せと、少女に死ねと叫んでいるのだ。

そんな状態で、希望だと思えたのが子ども達だった。

子ども達は、周りの大人の真似をし、特に意味も分らず「笑顔」でコールに参加している。

子ども達のように、全員が全員、真意でこの集団に賛同しているわけでは無いと思えた。

親父はこの人数……いや、これ以上の人を救ったんだな……。

俺も、既に逃げ場は無い。

処刑台に落ちまったしな……。

腹あ括るしかない、か。

俺は、市民全体を見回してから、コールに負けないよう叫んだ。

「ふっ……ざけんなああああ!!!!!!」

俺の第一声。

「なんなんだよこれは……義国とも呼ばれるシンセプトの国民のほぼ全員が、「悪魔族だから」という理由だけで、差別し、迫害し、追放し……挙句の果てには殺せだど??」

先ほどとは打って変わって、市民は静まり返っている。

「俺は、この世界の人間じゃない。だから、この世界の風習とかに、とやかく言える立場じゃない。だが、この世界の人間ではないからこそ分かる事もある」

腕の中の少女を見た。

少女は、俺の顔をまっすぐに見ている。

「だがな、この世界の人間でも、そうでなくても、当たり前すぎるほどに分かる事だ。その世界にきちんと「一つの種族」として存在しているのにも関わらず、追い詰める事は最低だっ!!!!」

この迫害され、最後には処刑されそうになった少女に、俺は自分の影を見たのかもしれない。

ま、俺は処刑されそうになって無いし、この子ほど酷い扱いをされたわけではない。

この子に影を重ねるなんて、おこがましいかも知れないがな……。

そして俺は、後方に居るこの国の主に向けて一つの問いを投げかけた。

「ヴェルヒム様、俺は本当に救世主となれるんですよね？」

聞いた途端、にっこりと微笑んで、頷いた。

「ええ、あなたはヒエンの息子であり、創造魔法を引き継いだ。これ以上、証拠は出せませんね」

それが聞けただけで充分だ。

「だったら：今、ここに宣言する……！」

——もう後戻りは出来ないぞ？

例の声が聞こえてきた。

「我が名はサキモトホムラ……！」

（覚悟の上だ！）

声に向かって言ってる。

「俺は、この世界の救世主となり、イマジンを元の、正常に直し……！！！」

——本当に良いのか？

声は、俺を挫けさせるかのように言ってくる。

「この世界の全ての住人に安息をもたらす……！」

（ここまで来て、戻れるなんて思ってた無さ）

「だが、同時に、救世主として、この「世」自体を救うため……！！」

——たった一人の人間が、世を救うなんて、おこがまし過ぎるだろう？

俺はその声を聞いて、折れかけた。

……が、

（確かに、おこがましいだろうが……だったら俺以外に、誰がやるんだ、誰が出来るんだ！！！！）

「……さっ、先に言ったように、種族なんて関係無く、全ての住人が気兼ねなく住める世界にするため……あんた達、悪魔族以外から嫌われてもいい、だから、悪魔族も含めこの世界を救ってやるっ！！！！」

軽くつまずきそうになりながらも、全て言い終わった。

——………………。

声は、沈黙してしまった。

額と背中に嫌な汗が滲み出る。

……パチパチパチパチ。

後方から単独の拍手が聞こえた。

振り返ってみれば、ヴェルヒム様が一人で拍手してくれている。

……パチパチパチパチパチパチ！！！！

民衆からも、盛大な拍手が聞こえた。

「いいぞ、新しい救世主……!!」

「あんたみたいな奴を待っていたんだ……!!」

見てみれば、それはほとんど若い者達からの声であった。
やはり、全員が悪魔差別をしている訳ではなかったのだ。

俺は、重度の精神的重圧が一気に抜けたためか、その場に倒れたのを覚えている。

完全に気を失う前に、ふたつの声が聞こえた。

一つ目の声は……

——新しい救世主よ。 見事だったぞ。 今後の活躍に期待させて
もらおうか。

なんだよ、言うだけ言って、消えるのかよ……。

二つ目の声は……

「焰君ッッ!!」

この声……佐久間……?

確認する前に、俺は気を失った。

第27話..悪魔族少女ライアとの出会い

……夢を視た。

長い長い夢。

まるで意地悪く、じわりじわりと恐怖と絶望が押し掛かってくる悪夢。

それは……世界が終わる夢。

鳥の鳴き声で目が覚めた。

夕暮れ時を飛ぶカラスの鳴き声だ。

なんだろう、3ヶ月くらい寝ていた気がする…。

「おや、目覚めましたか」

ベッドの傍らのイスにヴェルヒムが座っていた。

「俺は……」

思い出した。

あの大勢の民衆の前で啖呵を切った(?)のかは分からないが、大仕事をした気がする。

「いやはや、見事でしたよ。おかげでその娘も助かりましたし」

ヴェルヒムの視線を追うと、隣にあるベッドにさっき処刑されかけた悪魔族の娘が寝かされていた。

まだ幼さを残すその寝顔に、さっきの様な処刑台はまったくもって不釣り合いだと当然ながら思った。

いや、おいちよっとまで……

「……あの、一つお伺いしたいのですが、ヴェルヒム様？」

「なんででしょう？」

笑顔のヴェルヒム。

「ここ、確か俺の部屋ですよ？」

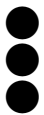
「そうですね、確かに貴方に割り当てられた部屋ですね」

変わらぬ笑顔のヴェルヒム。

その顔には何も言わせぬ気迫があった。

「まあ、先に貴方が起きる事は分かっていましたからね。さてと、私は仕事があるので失礼します。大変お疲れなのは重々承知しているつもりですが……^{せんえつ}僭越ながら、その娘が起きるまで見てあげてください。お願いします。もう少しで起きるはずなので……」

先の笑顔同様に、何も言わせない勢いで喋り、部屋を出て行く。
まあ、終始ヴェルヒムの目元と口元に浮かんだニヤ気が疑問だった
がな……。



……しかし、意外だった。

「しばらく」とか「もう少し」とかの表現をする暇もなく、悪魔族の娘は目覚めた……というよりかは起き上がった。

「ふわああああ……あふう」

まず最初に盛大なあくび。

次に伸びをして各関節をポキポキ……。

そして、その行動を逐一凝視してた俺に、結構時間が経ってから気付いた。

「あ……あははは……」

なんだか照れくさそうに乾いた笑い声をあげるその娘。

少々戸惑ったような表情をしていた俺にその娘は言った。

「あの……どもす」

初対面の人物にそれはないのではと思いつつ、結局は面倒だ。

「あ、どもす」

同じように返していた。

その自分に軽く嘆いた。

「あの……わたくし、『ライアーカーミラ』と申します。先ほどは助けて頂き誠に……」

その時点で俺はストップをかけた。

「ストップ、まで、そういう堅苦しいのは無しだ、ライア」

まあ、あの「どもす」からいきなり敬語使われてもな…。

「あ、お堅い人じゃなくて良かった、ホムラ様♪」

俺の名前は既に知っている様だ…てか、アノ時に名乗ってたっけ？
ん？

「なあ、様ってなに？」

当然の疑問。

「ああ、忘れてました！！ わたし、ストラトス国王「サキューナ」様の側近でして、今回ホムラ様が行う救世の手伝いという事で、ホムラ様にお仕えしろとの命令を受けて…それで、あの…あの…」

最後に急にどもり始めた。

「あ、あの、ですね。 ちゅ、ちゅうをして頂きたく……」

「は?..?」

全く持って状況を把握できてない俺は間拔けな返答。

「あの、もちっと詳しく言えば、悪魔族のしきたりで、悪魔族の女性が誰かに仕える時に、その契約として身体の部位どこかにちゅ、ちゅうをして貰うというのがありまして……」

……良く分からんしきたりだな。

まあ、それがしきたりと言われる所以かも知れんがな。

「つまり、ライアの何処かにキスすればいいんだな？」

俺はそこら辺、鈍感（自分で言うな）なので単刀直入に言う。

「あ、はい！ つ、つまりはそういうことですね！」

悪魔族ではそんなにキスは恥ずかしい事なのか？

マウストウマウスならともかくな…。

ライアの声が裏返りまくりだった。

「額でいいか？」

俺の提案に激しく同意し、首をぶんぶん縦に振るライア。

「そ、そうですね、その方が恥ずかしくないし…」

先ほどまでよりかは落ち着きを取り戻したライアの綺麗な銀髪に手を掛けた。

身体に触れられたからか、ライアはビクッ！と小さく跳ねた。

目にギリギリかかるその銀髪は、近くで見ると青色を含んだ何とも言えない色だった。

俺はライアの前髪を掻き上げ…て、結構デコ広いな。

そんなことを思いながら俺は静かに額に口付けた。

ボンッ！！！！

そんな音が本気で聴こえた。

次の瞬間、ライアはぐらっと倒れこみ、俺に抱きとめられた。

その次に聞こえた音は、部屋のドアを開ける音。
入ってきたのは……佐久間とルネだった。

佐久間、ルネ共々似たような驚愕の顔。

その顔で気付いた。

ああ、今俺傍から見れば、ライアを抱きしめてるのか…。

最近、思うことがあるんだ。

……俺ってこういうフラグが立ちやすいの？

第28話：プラインの異変

「何…してるの？ 焰君…？」

なんつータイミングで入って来るんだよ！

とりあえず、このままではとても危機的状況になるだろうし、当事者が落ちてしまっている以上、俺はテキトーにごまかす事にした。

「いや、ライア…この娘がさっき目が覚めたから、色々と喋ってたんだよ。 だけど、どうやら無理してたみたいでさ、今また倒れたんだよ」

この説明は苦しいか？

…正直、今の説明の方が無理あると思ってしまった。

「それで、ベッドから落ちそうになったから、俺が抱きとめた、と…ちようどその時にお前らが入ってきたんだよ」

補助解説での追撃。

頼む、あっさり撃沈してくれ！

……………。

その場に嫌な空気が流れた。

緊張のあまり、俺の額には一筋の汗、 …いや、たらしでないからね？

「…そ、そうなんだ！ い、いや、私たちはただお見舞いに来ただけだからさ」

そう言いながら片手にバスケットを持った佐久間とルネが入ってきた。

なんだろう、俺は別に悪くないハズなのに、何故こんなにも緊張したのだろうか？

佐久間はバスケットの中から色とりどりの果物を……て、おい？

「……ドリアン？」

佐久間が手にした果物の中に、くすんだ緑色のバスケットボール大よりも大きいかもしれない球状の、全体に棘が生えているものを取り出していた。

「あ、焰君もドリアン知ってるの？　おいしいよねえ、これ」

確かにおいしいし、果実の王様と呼ばれて入るが……とにかく臭いが強烈なんだ、この果実。

知らなかった人は是非ggってみてくれ、大抵の所にはちゃんと書いているからな。

「あのさ……ドリアンはやめてくれ……においが……さ」

先手必勝、先に言っておけば大丈夫。

「ん……仕方ないなあ……それじゃ、どれ食べる？　剥いてあげるけど」

うむ……特段食べたいとは思ってないのだがな……。

「……和梨を頼む」

せっかくの厚意を無下にするのもなんなので、おとなしく甘える事にした。

何故、あんな事如きでここまで介抱されるのかは分からない。

しかし、なんだかんだでこのゆったりとした雰囲気には俺は和んでいた。

これは、一種の現実逃避だったのかもしれない。

先ほど見た悪夢。

よく分かってはないが、俺が何かを何とかしないと、何となくこの世界は危ないらしい。

そのせいで、破滅していった世界。

そんな夢であった。

具体的な内容は覚えていないが、とにかく今の俺に多大なプレッシャーが押し掛かっている事は間違いない。

だけど、そう鬱な気分になってばかりいても仕方がない。

結局は自分で決めてしまった道なのだ。

こうなったら腹をくくるしかない。

こんな事を一瞬考えてはいたのだが、一方、少し樂觀している部分もある。

他国に行くのに、俺一人で行かされる訳ではないだろうし、護衛のような人を付けて貰えるだろう。

あわよくば、プラインとルネが同行してくれると、とても心強い。

それと、多分このライアという少女も同行するのだろう。

まあ、全てはその時にならなければ分からないけどな。

その後、ライアが目覚め、俺の顔を見た瞬間、赤面したが、俺の懸命なフォローのおかげで事なきを得た。

少々心配はしたが、それは見当違いだった様で、3人はすぐに和気あいあいと談笑を始めたのであった。

既に俺の入る隙なんてねえよ……。



既に日は沈み、満点の星空が瞬いているこの夜。

いい加減飽きてこないのかと思うのだが、先ほどの談笑はまだまだ続いていた。

しかし、突然の来訪によって終止符を打たれる事になる。

コンコンコン……

いち早く訪問者に気付いた俺は、返事をしていた。

「開いてます、どうぞ」

ガチャ…

「ホームラ、ここにルネいるだろ？ ヴェルヒム様に頼まれたから呼びに来たんだ…が……？」

俺の部屋に訪問してきたのは、プラインだった。

しかし、部屋の中を見回したプラインの表情は、次の瞬間激変していた。

ルネはもう見つけたはず、では何か？

プラインの視線を追ったその先には……ライアがいた。

憎悪一色に塗りつぶされた表情と目線が、ライアを見ていた。

対するライアは何も感じないかのような無表情。

「き、貴様…あく……」

「す、すぐ行くっ!!」

ルネは慌てふためきながら、半分プラインをこの部屋から引きずり出すかの様に出て行った。

何も分からない俺、佐久間、ライアはただただ呆然と二人が去っていった扉を見つめ続けるしかなかった。

その後、夕食を取り、テキトーに解散して床についたのはいいのだが、先ほどのプラインの言動が引っかけ中々寝付けなかった…。

余談だが、何故だか知らないが、この日だけライアと俺は同じ部屋に寝るハメになった。

第29話…序章・完

「では、プラインとルネ、それにトウカとライアはホムラ殿の護衛としてストラトスのライジユ島へ行ってください」

次の日、俺たちはヴェルヒムに呼び出され、例の行軍に付く人員が言い渡された。

「……昨夜も言ったと思うが、無理だ。俺には出来ない」

まず反論したのはプラインだった。

「俺は悪魔の肩だけは持たない。誰に言われようとな！ ……それはルネでもホムラでも、ヴェルヒム様であってもだっ！！」

言い終わってから、はっとしてから、気まずそうにプラインは玉座の間から出て行った。

「はぁ……まあ、こうなる事は薄々わかってたけどねえ。他に反論のある者は？」

ヴェルヒムがため息混じりに言った。

「はい」

待っていたとでも言いそうなタイミングと迫力で反論者が出た。

「トウカ……お前はただホムラ殿が気に食わないだけでしょ？」

「そんなので同行しないのは許しませんよ？」

反論しようとしていたのはトウカ近衛隊長だったが、ヴェルヒムに一蹴された。

「しかしっ!!」

トウカがしつこく食い下がる。

「トウカ近衛隊長、君が拒むなら、その代わりにミノリ巫女殿に同行してもらう事になるが……？」

鋭い声音でヴェルヒムがトウカを指差して言った。

……初めてヴェルヒムが国王の威厳を現した気がする。

「ちなみに、ミノリ殿にはもう了承を得ているが……？」

ヴェルヒムが追撃を仕掛ける。

あの視線なんかサドっぽいな…。

「そ、それはなりません！ それでしたら、私が行きます!!」

どんだけ稔里に行かせたくないんだよ…。

「さて、トウカの説得は終了したとして、他には？」

10秒ほど待って誰も言わないので、ヴェルヒムは次の議題に入った。

「さて、プラインが抜けてしまった穴がありますね。その穴を埋

めなければなりません」

いや、プラインには悪いが、埋めなくとも十分な戦力な気がするが……。

「それで、その穴埋めとして私はシルファ団長にお願いしておりました」

「「「え?」「」「」」

その場にいる全員が、己の耳を疑った。

ガラガラ……

「義国シンセプト、騎士団団長シルファⅡリンクス。王の命により、参りました」

本当に来ちゃったよ……。

ヴェルヒムが指し示した人物は、この国の騎士団長だ。そして、実際にその人が来てしまった。

そんな重鎮が、こんな事に時間など割かれていいのだろうか？

「どうも、お久しぶりです。救世主、サキモトホムラ殿」

シルファは俺の前へ来るなり、恭しく礼をしてきた。

「こちらこそ、お久しぶりです。シルファ団長」

俺も慌てて返し礼。

「てことで、当のシルファも承諾してくれているし、これで解決と。
……それでは、これをもって会議を終了とする」

ヴェルヒムの一言によって解散となった。



解散した後、丁度昼飯時だったので、ルネと一緒に食事を取る事にした。

なんか、ルネが俺に話があるらしい。

「うお、美味しそうだな」

本日の昼飯はアノルネが作ったとは思えないものだった。
その名はサンドイッチ。

野菜、卵、ベーコンなどが挟まれている。

俗に言うポピュラーなものだった。

とりあえず、食べ始めた。

とりあえず、ちよくちよくルネの話が始まるのを待っていた俺だが、
どうやら食べ終わってから話らしい。

……食べ終わった。

「ごちそうさま。美味しかったよ」

俺はルネに感謝。

「おそまつさまでした。 まともなものが出来てよかったよ」

額を手の甲で拭う仕草をするルネ。

一向に話が進まなさそうだったので、こちらから振った。

「それで、話って何？」

その言葉を聞いたルネは、一瞬ピクツ、となってから、静かに話し始めた。

「……今回のプラインの事なんだけどね」

薄々感付いていた事、疑問に思っていた事が邂逅されていた。

ルネの話を要約するところだ。

まず、プラインとルネは同じ村で生まれ育った幼なじみ。

自分達がまだ7歳前後だった時に、村が悪魔族の襲撃を受けた。

当時、まだ悪魔戦争の名残が、か細いが確実に残っていた。

シンセプトの騎士団が、その悪魔族たちを捕まえるために追っていた時、通りすがったのがその村らしい。

悪魔族の襲撃を受けた村は、軒並み燃やされ、抵抗すれば殺され……
：プラインとルネの両親も、2人の目の前で殺されたらしい。 ……
とにかく、まだ幼かった2人には衝撃的過ぎる惨劇だった。

その時、駆けつけた騎士隊を統率していたのが、今の騎士団長シルファと、弓術団長のノーティスという人だったと言う。

プラインとルネは2人に拾われ、ヴェルヒムの許可も下りたので、シンセプトの軍で育てられたらしい。

その時からプラインも、世間一般で言う『悪魔差別』をしているらしい。

「私も当時は悪魔族を憎んでたけど、今はもう違うの。皆が皆悪いわけじゃないもんね」

その歳でその結論に至ったルネは、個人的にすごく偉いと思った。

「だから、プラインはまだ悪魔族を憎んで、恨んで、呪ってもしるの」

なんだか、今のプラインが、最近までの俺と重なった、気がした。まあ、プラインほどの仕打ちを受けたわけではないがな。

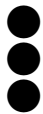
「わかったよ」

プラインはこのままでいいのか？

俺の中での答えが固まった。

「サンドイッチ、美味しかったよ。 ……ありがとうな」

俺はルネにそれだけ言って、その場を去った。



「なんだよ、話って…」

明らか苛立った声のプラインを、俺は騎士隊訓練場と言う場所に誘

った。

「俺の口からもう一度言う。 プライン、一緒に来てくれないか？」

俺は自分を落ち着かせて言った。

焦るな。 一つでも間違えば全てが終わるぞ…。

そう、自分に言い聞かせて。

「は？」

俺がそんなこと言うなんて思っても見なかったと言う反応である。

「ルネから話は聞かせてもらった。 だから…」

「ルネの奴、話したんだな。 あいつだけは味方だと思ってたけどよ…」

俺の言葉を遮って、プラインは悲しんだ表情を浮かべた。

「ホムラ、お前に一つ聞く。 …あの話を聞いた上で、俺を戻そうとする、その理由は？」

……………。

「俺の責任に、頼れる数少ない仲間がいて欲しいからだ。 …むしろ、話を聞いてさらに強く思ったよ」

俺の言葉に、プラインが笑い出した。

「ははははっ！！ お前やっぱ面白いわ、ホムラ。 でも、ダ

メだ、俺は一緒には行けない」

その返答を聞いた俺は、最後の手段に打って出た。

「なら、俺と勝負してくれ」

俺の言葉にプラインが反応した。

「…なんだと？」

「俺が勝ったら、俺に同行する。プラインが勝ったら、好きにしてくれ」

俺はそう言っていると、ヴェルヒムから授かった「ラジエートソード」を出し、構えた。

「ホムラ、お前誰に戦闘の基本教わったか、忘れてないか？」

ドスの聞いた声でプラインが脅してくる。

「覚えているからこそさ…」

ガキイイイイン！！！！

俺の剣とプラインが出した大剣がぶつかりあう金属音が、勝負の開始の合図だった。

○○○

結果的に言えば、一瞬で勝負が付いた。

俺がプラインに勝てる道理があるはずがなかった。
それでも、プラインが手を抜いてくれた事に感謝した。

「俺が勝ったんだから、好きにしていいいんだよね？」

俺は無言で首を縦に振る。

「んじゃ……もう、俺に戻れなんてことは言うな。次言ったら……
…今度は手加減しないぞ」

倒れている俺を尻目に、プラインは騎士隊訓練場を出て行った。

俺とプラインが運命を分けたこの日、この時から、この物語が、静かに動き出した……。

「全書・第八卷・六節」世界の全て」 （序章・完）

第30話：近衛隊長との一時

あれから一日が経った。

流石に、あの時点で皆の準備が整っているはずがないので、3日だけ準備期間となった。

俺に言い渡されたことは、魔力の向上：つまり、想像力を高めるとの事だが、それより実戦訓練をしたいんだが……。

ルネは持つて行く荷物の整理。

シルファは騎士団から離れるため、兵達の訓練を監視している。

ライアはといえば、四六時中俺に付きまどっていたが、今は用事があるとかでヴェルヒムの所へ行っている。

トウカはひたすら武に磨きをかけているらしい。

頼めるの一人しかないじゃないか……。

まさかプラインに頼むわけにも行かないしな。

その人の元へ行くため、俺は中庭に向かっていた。

稔里の情報だし、正確だよな。

中庭に近づくにつれ、緊張した気配が伝わってきた。

さすがお城という事もあるのか、中庭の植木は全て見事な造形に刈り込まれていた。

その中庭の中央、少し広く取られている円状の空間。

そこに俺の訓練に付き合って貰う人が居た。

普通、棒状の物体を振り回すと「ブンッ、ブンッ」と言う、空気の抵抗による音が鳴る筈だ。

しかし、その大刀は「ヒュン、シュン」と、まるで空気を切り裂いているのかと思えるほどの正確さを持っていた。

その舞とも思える大刀の素振りの光景に見惚れていると、不意にその音が止んだ。

「一体、何の用だ。　サキモトホムラ」

今まで素振りをしていた大刀の刃先をこちらに向け、トウカが睨みつけつつ言った。

「いや、剣術の教えを請おうと思ってね」

きつと即答で断られるかも知れないと思っていたのだが、予想は外れた。

「……正気か？」

信じられないとでも言うような目つきだった？

「それ以外に何かあるのか？　他の人は忙しそうだし、そもそも戦闘に関しての事をやってないし、さすがにプラインには頼めないし」

嘘偽り無しの率直な理由だ。

「貴様を出会い頭に殺そうとした私にか？　しかも2回も……」

まだ訝^{いぶか}しげにこちらを見ている。

「むしろ、そんな人に教えられたほうが身に入ってるね。　皆、死なないために必死になって頑張るものさ」

「なるほど…」

俺の言葉に、あごに手を当てて思案するトウカ。

お、これはいけるんじゃない？

「そういうことなら承知した。途中、足手まといになられても困るしな」

そういうとトウカはニヤツと不敵な笑みをした。

「よかった…。じゃあ、お願いします」

俺は深々と頭を下げた。

その様子にとウカはきょとんとしていた。



「今日はこれくらいか」

日が西に傾き、すっかり空が茜色に染まっていた。

こんな一日が早かったのは久しぶりだ…。

やっぱり身体を動かす事が好きなんだなと自分自身に感慨深かった。

「しかし、貴様はなんなのだ？」

奇妙なものを視るような目でこちらを見てきた。

「なにがです？」

教えてもらっているという事は、トウカが先生、俺が生徒という事になる。

敬語になるのは当然だった。

「お前、なんでそんなに受け流しばかりするんだ？ プライン殿は受け流しなどしない筈だし、そもそもこの世界に受け流しの剣術流派など無い筈だが……？」

訓練中、俺はトウカの攻撃をほとんど受け流していた。

それはトウカの攻撃法が大抵「突き」を主体とした攻撃であるからでもあった。

まっすぐに繰り出される力を横に受け流すのは簡単である。

前後の距離感と空間認識をしっかりとすれば、誰だって出来るのである。

しかも、突きを受け流すと、相手はその力を止めることなく、「全力で攻撃を外す」のである。

そうなれば、ボディーががら空きだぜ状態だ。

「小さい頃から親父に扱かれていて……その親父が受け流しをよく使ってたんで、そのせいで俺もそうなったんです」

プラインにも同じ事を言った気がする……。

「なるほど、ヒエンリュウケンジュツ「火燕流剣術か。それなら納得だな」

……なんぞそれ？

「ああ、前救世主のヒエン殿が使っていた剣術だ。決まった名前前は無かったが、後にそう呼ばれたんだ」

へえ、あいつの剣にそんな大層な名前がねえ…。

「受け流しだけじゃない、お前、どれだけの想像力あるんだ？ 訓練中に魔法を使いまくった割には、魔法疲労イマジングが見受けられないが…」

「いや、これでも凄く後頭部が痛いです」

『魔法疲労イマジング』とは想像魔法を使った時に起こる頭痛の事だ。

戦闘中に使う場合、常に動きながら鮮明に綿密に想像しなければいけないため、とてつもない集中力を必要とし、多大な体力を削る。慣れない内はとても疲れる作業なのだ。

「まさか、嘘でしょ？！ 全然そんな素振り見せなかったのに……」

俺が使用した魔法は「追風陣」5回、「武器出し」7回、「無追閃」3回。

武器出しはまったくと言って良いほど魔法疲労は無いが、移動や攻撃の魔法である追風陣と無追閃は初心者には一回ずつ使えば良い方だと言う。

「本当に貴様は……なんでも出来るのだな。……テストも毎回満点だし…」

「え？」

最後はゴニョゴニョして聞き取れなかった。しかし、トウカの顔が拗ねたような表情だったのは分かった。

「い、いや、なんでもないぞ？ ……そ、そろそろ夕食の時間だな。じゃあ、本日は解散だ」

本日は、という事は、明日もしてくれるという事か。

「ありがとうございますっ!!」

深々とお辞儀。

○○○

そうして、俺たち5人は3日後、シンセプトを発発する事となった。

旅立ちに最適な、風は穏やかな快晴。

シンセプトを出発してストラトスに向かう所である。

「本当ならば私も行きたいのですが、この国をほうって置く訳には
いきません。すみませんが、よろしく願いします」

城門前にて、ヴェルヒムと稔里が出送りに来てくれた。

「いえ、一部…と言うより大部分が自分で招いた様なもので…
そう言って苦笑しながら俺は、チラリとライアの方を見た。

「ふふふ、良いではないですか。自分の信じる道を突き進むのは」
陰りを見せつつ、ヴェルヒムは言った。

「元気でね、焰くん。生水に気をつけてね？」

ヴェルヒムの事など露知らず、俺の手を握りながら言ってきた。

「ミノリ、あんたはコイツの母親か」

すかさずトウカが稔里につっこんだ。

「ライアはサキューナによく言っておいてください。それに
シルファ、ルネ、トウカはホムラ殿の防衛をお願いします。…特
にトウカ？」

「わかっております、私も子どもじゃありません。 任務中は私情を挟みませんよ」

ため息混じりに答えていた。

「ならば心配ありませんね。 皆さん聞いているかと思いますが、この任務中はホムラ殿がリーダーとなります。 ホムラ殿の言う事はちゃんと聞くように」

メンバー一同が頷いた。

ちよっとまで、そんな話は聞いていないぞ。

「当然です、ホムラ殿には言ってますでしたからね。 と、時間稼ぎもほどほどにして、そろそろか…」

やけに出発に時間かかるなとは思っていたが、時間稼ぎって…そう思っていると、空の彼方から複数の影が見えた。

「来ましたね」

徐々に近づいてくるそれは、この世界に来て初めて出会ったものに酷使したものだった。

馬鹿でかい3頭の飛竜が近くに飛来し、そのうち一人が乗っていた竜から降りて、こちらに駆け寄ってきた。

「お久しぶりです、ヴェルヒム様」

「こちらこそ、久しぶりですね。 ヨミ殿」

見た目二十歳ほどの童顔で帝国の紋章入りの鎧を着た青年。

「はじめまして、僕はヨミ。帝国ドラグナールの皇子です。以後お見知りおきを」

わお、お偉いご身分の方でしたか。

「俺は…ホムラと言います。 ええと……救世主…やってます。以後お見知りおきを」

苗字はこの際、面倒だから省いたが、そんなことはどうでもよく、なんでこんな身分が高いのがここにいるんだ。

「私と言うより、私の国が本格的に悪魔族を救うと宣言してしまったので、その事についての会議をこちらで執り行うのですよ」

なるほど、つまりは俺のせいってことですかい。

「へえ、あなたが新しい救世主様ですか。 今回の任務、無事に遂行出来ることを祈っていますよ」

笑顔で手を差し出してきたので、もちろんそれに応じる。どこことなく龍青に似ている雰囲気を持っていると感じた。

「それでは、そろそろ参りましょうか。 ホムラ殿、行きましょう」

シルファの発言で、やっと出発することとなった。

〇〇〇

そして、特に何事もなく城塞都市ジェイバルを過ぎた頃、虫が良すぎたためか、当然街道には魔物がいるわけで…。
ゴブリンのような、多数の小人と遭遇していた。

第32話…余裕の戦闘

その身にはただのボロ切れを纏っただけで、その隙間から見える深緑色の肌。

なんとか人型と言える体躯は、頭2個分ぐらい小さい、いわゆる小人。

その手には大小様々な棍棒や木の枝が持たれている。

城にあった図鑑に載っていたある魔物に酷使していた。

『ゴ布林』

基本的に弱い。

体が小さく、動きがすばやい。

頭が悪いため単調な攻撃しかしないが、その腕力は侮れない。

…と、書いていたはず。

そのゴ布林がざっと見て十数人(?)。

街道を行く俺たちの前に立ちふさがった。

「へえ、一気にこんなにいるの初めて見た」

緊張感のない声でルネが言った。

何を暢気には思ったが、場の空気が緊張していない。

つまりはそれほどルネや他のみんなにとっても弱い、たわいないと言ふことなのだろう。

まだまだ戦闘に不慣れな俺は変に緊張したのだが、ルネのおかげで適度にリラックスできた。

その時、先頭辺りにいた数人が獲物を振りかざして、俺に襲い掛かってきた。

「でやあ！ はあっ！ たあっ！！」

冷静に、尚且つ気合をいれ3撃ほど剣を振ってみれば、あえなくドサツと3人が倒れた。

続けざまに5人が走ってきて、俺を取り囲もうとしたのだが、思っていたよりも遅く、囲まれる前に倒してしまった。

「なんだ…意外とあっけないな……」

結構余裕で倒せてしまっている事実に関心驚きながら、ぼろっと本音が出てしまった。

ウオオオオオオオオオオオ!!!!

俺の言葉を理解したのか知らないが、群れの中で一番大きい体躯のゴブリンが雄叫びを上げながら襲い掛かってきた。

少しだけ不意を付かれた俺は、交わす間もなかったので咄嗟にプラインに習った防御の姿勢をほとんど反射で取っていた。

ガイイイイイン!!

「ぐあっ!!」

獲物がぶつかり合う金属音が聞こえると同時に体に走る衝撃。

確かに、体が小さい割には力が強い。だが……

「んなのプラインの比じゃねえっ!!!!」

軽く痺れた腕をかばうために、右足のつま先を軸とする回転横薙ぎ。

ザシュン!!

遠心力を味方につけたその一撃は、目の前の敵の生命をあっけなく奪った。

ボスがやられたことによって、残りのゴブリンは一目散に逃げた。

激しく体を動かしたはずなのに、達成感の強さが勝ったのか、あまり疲労を感じなかった。

まあ、当然と言えば当然、時間にして2分もかかってないはずだからな。

「おおーやるじゃーん♪」

ルネが後ろから駆け寄って来て俺の肩をバンバン叩いた。他の面々も遅れて駆け寄ってきた。

「我々が出る幕ありませんでしたね」

「ま、まあ…太刀筋は悪くなかったわよ」

シルファとトウカは褒めてくれた…と思いたい。

「ご主人様すごいすごーいっ!!」

残りのライアは突進頭突きを俺の腹に喰らわせた。

…最後のは正直痛かったが、みんなから貰う言葉が果てしなく恥ずかしくも嬉しかった。

ところで、ライアが俺のことを「ご主人様」と呼んだのをお気づきだろうか。

あの「デコキス」事件以来、名目上ライアは俺に仕えていると言う事になっている事に加えて、呼び方は好きにしているという、我な

がら無責任な発言によって「ご主人様」と呼ばれるようになってしまった。

最初は自覚もなく、結構呼ばれてもスルーしてしまったことも多かったが、慣れというのは恐ろしいもので、既にその呼び方に順応しかけている自分が怖い。

話は戻り：

「さて、次の町までどれくらいだ、ライア？」

「あ、はい：えと、ちよっと待ってください。 我が欲する情報を
我が前に示せ：虚の羅針盤^{ホロウコンパス}」

魔法を唱えた途端、濃い紫の霧が発生し、その中からA4の紙ほどの羅針盤が出現する。

その羅針盤を覗き込むライア。
程なくして、ライアからの返答が来た。

「ええと：ここから約35セクト：お昼過ぎには着きますね」

今が正午過ぎくらいで、残り35セクト：なるほど、あと40分くらいで着くのか。

「あと少しじゃないか、急ごう」

俺の判断に皆が同意して、進む速度を速めた。

○○○

その後、数回魔物と遭遇し、その都度撃退。

実践として、とても良い経験になった。
そして、そろそろ疲労感が溜まって来た頃、俺たちはストラトスの
沼畔の町、ケルツァエームに着いた。

第32話：余裕の戦闘（後書き）

専門用語解説

『セクト』

距離、長さの単位。

1セクトで大体100メートル。

劇中の35セクトは、つまり約3.5kmほど。

第33話：神想結晶

シンセプトとストラトスの国境で、ギリギリでストラトス国内の街ケルツァエイム。

標高の高い山脈に挟まれた自然要塞。

ストラトス側は大きな湖のような沼になっているらしい。

ストラトスはもともと北方地域であり、魔力が集まりやすい場所で、湖や海などは存在していなかった。

しかし、悪魔戦争の名残で地殻変動が起こり、陸は国土の約30%しかなくなった。

残りの70%は殆ど地殻変動によって地中から噴き出す毒素によって毒沼と化している。

その毒沼に適応を示す魔物が増えているため、ストラトスの魔物はシンセプトのそれとは比べ物にならないらしい。

陸地は南端の義国との国境がある「ベノ陸地」、中央、首都ストラトスと各都市がある「中央大陸」、西には帝国との国境がある「セブル地帯」、それと北にぽつんと浮かぶ「ライジュ島」の4つだけ。

陸地間の移動手段は船と言う。

当然、地球にあるような大型の船ではあるらしいが、木製の船であるという。

某有名海賊漫画オネ・ピースに登場する船などを想像してみてください、多分そんな感じだ。

中には竜に匹敵するほどの魔物も存在するらしい。

出会わないのを祈るだけだ。

以上の情報は、俺が城にいた時に読んだ書物とシルファ、トウカの

情報を基にして整理した結果だ。

そして、今俺たちはケルツァエイムの食堂で腹を満たしていた。

一服ついた俺たちは中央大陸への船の出港にまだ時間があるので、それぞれ自由行動になった。

俺はといえば、まだまだ足りない魔法の知識を埋めべく書店へ直行。

さすがは魔力が高い種族が多い国だけあって、魔法に関して興味深いものばかりで、俺は内心ワクワクしていた。

魔法の種類に関してのもの、魔法の系統に分けての解説や魔力の向上についてのものなど、とても興味をそそるものばかりだった。

立ち読みOKだったので、俺は何冊かに絞って熟読した。

その後、俺は気になったものを何冊か選び、買おうと会計に向かった。

どうせ船の上では暇になる可能性が高いしな。

会計の台に本を載せた。

すると、会計係が俺の買おうとしてる本を見て怪訝な表情をした。

シルファから受け取っていた金を入れた財布を取り出しているとき、ふいに横から声が入った。

「ねーママー、あのおにいちちゃんオレよりおっきいのに、オレよりマホウよりランクのひくい本かってるー！」

横を見ると、まだ5、6歳の男の子が俺を指差して大声を出していた。

なるほど、店員が先のような表情をしたのはそのせいかな。

「こら、何てこと言うのー!! ごめんなさい、うちのバカ息子が…」

母親がすっ飛んできて俺に謝罪をしてペコペコし、顔を上げたとき

に言葉を切った。

「あの、もしかして…ホムラ…様？」

何故かその女性は俺の事知っていた。

「ええ、まあ…そうですね…何故俺の名前を…？」

俺が台詞を言いおわる前にその女性は叫んでいた。

「すみませんっ！！ ご無礼をお許しください、ホムラ様！！」

さつきとは雰囲気が違う。

まるで懇願するかのようなニュアンスが入っていた。

そして何故、様呼びされるのかもわからない。

「ええ?! いやいや何ですか、いきなり。別に怒ってないですし…」

俺は意味不明な状況に慌てていたら、それだけでは済まなくなってしまうた。

なんと、店内の周りからも声が上がったのだ。

「なに、ホムラ様だと?!」

そのような声と共に数人の男性が俺の前に現れた。

それを皮切りにどんどん人が集まってきた。

ちよつとまで、俺はこうなるような著名人じゃないぞ。

そこに丁度トウカが登場。

「なにやら騒がしいと思って来てみれば…なにやってるんですか！」

事の顛末を話してる暇はないので、とりあえず救助を求めた。

「はあ、わかりましたよ。 ……ジンブウショウハ塵風昇破ッ！」

トウカが刀を抜き放ち、魔法を使ったため突如、俺と俺を取り巻く民衆に突風なんてものじゃない風が吹いた。

「ほら、行きますよ」

トウカが風によって倒れかけている民衆を押しつけて、俺に手を伸ばしてきた。

「トウカ、助かったよ。 サンキュ」

俺はトウカの手を取り、そこから逃げ出した。
船着場に向かいながらトウカに事の顛末を話すと、俺の疑問はすぐに取り払われた。

「この前の宣言が新聞に出回ったって事でしょう」

なるほど、こっちにも新聞や写真とかの技術はあるんだな。

「あなたは救世主としての自覚と、救世主がどれほど大きい存在か、しっかり把握していないんだ。 今回に限っては特に悪魔族に大きいだろうし」

あの処刑台での出来事が鮮明に脳内に蘇る。

あの決意の言葉は口だけじゃない、本心もちゃんと着いて来ている。俺個人の感情などを無視して考えても、どう考えても「良い」状況じゃないのは確かはずだ。

しかし、本来ならばイマジンの枯渴をどうにかするという仕事だ。冷静に考えて、同時に2つの事を行うのは不可能だ。

とにかく、今はこの世界の異常を改善するために行動しよう。そう心に誓いなおした。

あの後、大急ぎで船着場へと向かった。

俺が本屋での物色で思いのほか時間が経っていたらしい。

そして、俺のせいで少々遅れて船が出航した。

道のりは60セクトほど。

現在の天候はどんよりとした曇り。

毒沼は不気味な濃い霧に覆われている。

俺は甲板の椅子に座り、先ほど買った本の中で魔物図鑑のようなものを読んでいた。

そして、俺の目はある1ページに止まった。

『毒蛇竜リュケイムス』

大きいもので全長1セクトに達し、毒沼全域に生息。

神出鬼没で俊敏、性格は凶暴で、遭遇した船はほとんど沈められるという。

水中に生息しているようで、戦闘時には口から吐く強酸がとてつもなく強力。

尻尾や胴を使って船体を破壊してくる。

唯一弱点と言われているのは、火炎。

リュケイムスが吐く酸は可燃性で、もし熱が口内に入れば燃え盛り、怯む事が確認されている。

歴戦の戦士、傭兵でもいまだ倒したものは存在せず、全ては逃げき

った者達だけである。

……そう書かれていた。

「そいつは厄介ですね。私でも倒すのは至難の業だと思います」

俺の座ってる椅子に手を掛け、シルファが本を覗きながら言った。

「まあ、そもそも遭遇すらしたことのない相手ですけどね。それの噂は良く聞きます。ストラトス最強の魔物と…ね」

その言葉を聞いて複雑な心境になった俺の胸中を察したのか明るい声で言った。

「でも、そもそもの遭遇確立が低いのです、安心していきましょう。いざと言う時の準備は怠らずにね」

シルファの意見に賛成だった俺は無言で頷いた。

もしリュケイムスが襲ってきたら、俺の瞬霆剣は雷を帯びている。熱にもなり得るので、好都合だ。

それに絶命させずに逃げることは簡単だろう。

雷といえばシルファ団長の技もある。

あえて懸案事項をあげるならば、この船の耐久力と眼前に広がるこの濃霧だ。

いきなり船底に穴をあけられたらどうしようもない。

加えてこの視界の悪さだ。

前方10メートルも見えてない気がするのは俺だけか？

シルファに遠回りだが安心しろと言われはしたが、なかなか安心できない。

逆に徐々に心拍数が上がり、動悸が激しくなっている。

悪魔戦争前はただの石ころに過ぎなかったブリングも、悪魔戦争の折にマザーブリングが生成されたために大気、地殻全てのイマジンバランスに影響を及ぼし結晶の内に秘める魔力が著しく増した。今では魔法補助道具として使われている。

ラピスはもととも存在しておらず、ヴァルセーバーの折に関係のなただの鉱石に魔力が宿ったもの。

現在では主に武器、防具に使用されたり、高純度のもものではブリング同様、魔法補助道具として使用される。

：そんな説明文あたりを読んでパラパラとページをめくると、あるページに引っかった。

この書物も後半はブリングやラピスの図解が載っており、有名なものは詳しく載っている。

その中で、マザーブリングと言われる7つの内の1つ。

『ホムラのブリング』

500円くらいの大きさのガラス球のようなもの。

その内部には常に炎が揺らめいて見えるという。

ふと、制服の内胸ポケットをまさぐったら、あるものを見つけた。

この世界に二回目に来る前に母さんから渡されたもの。

ひとつは折れてしまった剣。

もうひとつは、内部で小さな炎が揺らめいている……ブリング。

詳しい事は聞かなかったが、もしかしたらこれがそうなのでは？と疑問に感じた。

手でそのブリングを弄んでいると、後ろから声を掛けられた。

「あれ、ご主人様ブリング持ってたんですね？」

ライアだった。

呼び方だけで判断できるのは時として便利かもしれない。

「ああ。 まあ、使い方なんてまったくわからないんだけどな」

それを今からこの本で勉強するところだ。

「ええ?! 見たところかなり純度の高いブリングですよ? 宝の持ち腐れじゃないですか~」

確かに。

「それを今からこの本でわかるようにしようとしてたんだよ」

ピラピラと手に持っている本を見せた。

「なあんだ、そんな事なら私に言ってくださいよう。 手取り足取りご指導いたします!」

シャキッと敬礼の真似事をして、得意げな顔をしている。

「まあ教えるとは言っても、ただ単にそれも想像するしかないんですけどね」

ライアが言うには、ブリングも人によって相性があり、得意不得意が起こりやすいらしい。

俺のは、親父から受け継いだ事もあり、このブリングとの相性は最高らしい。

そして、ブリングが宿している属性の力を魔法と同じように想像する事によって、その属性攻撃が出来たり、魔法を使用したときの魔法疲労が軽減されたりと色々ある。

俺のはもっぱら前者の属性攻撃、戦闘補助と戦闘で最大限に発揮されるタイプらしい。

そういえばシンセプトの玉座の間でトウカと小競り合った時に、体から炎が噴出されてすごく高く跳んだ記憶がある。

今考えれば、それもブリングの力だったんだろう。

試しに、言われた通り腕を真上に上げて、飛刃と同じ要領で火の玉が飛んでいくのをイメージ。

ボウッ！！

いとも簡単にバレーボール大の火球が天に昇っていった。

魔法疲労も大して感じない。

更なる力がついた事に嬉しくて、ひそかながら感動していると、突如船の乗組員が声を上げた。

「4時〜7時の方向から魔物の接近を確認！ 急いで戦闘準備をっ！！」

おいおい、まさか「ヤツ」じゃないだろうな…

武器をつかんだ俺の手のひらは、当然湿っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1160e/>

全書・第八巻・六節 “世界の全て”

2010年10月28日03時05分発行